



第 65 回国際学生会議

The 65th International Student Conference

事業報告書

総合テーマ

Embrace Diversity as Youths of Today
and Driving Forces of Tomorrow

多様性の真価を享受する

～今を生き、明日を創る力として～

目次

| | |
|--|----|
| 第 1 章 序章..... | 2 |
| 序文..... | 3 |
| 団体理念 | 4 |
| 団体沿革 | 5 |
| 実行委員名簿..... | 6 |
| 総合テーマ..... | 8 |
| 第 2 章 事前活動..... | 9 |
| 事前招集会開催概要 | 10 |
| 事前招集会 プログラム概要 | 11 |
| 学術セミナー総括..... | 12 |
| 参加者交流総括 | 13 |
| 事前勉強会総括 | 14 |
| 第 3 章 会議..... | 15 |
| 概要..... | 16 |
| 会議 プログラム概要 | 18 |
| 参加者名簿..... | 19 |
| 事前研修旅行総括..... | 22 |
| 事前研修旅行紹介..... | 23 |
| 会議総括 | 28 |
| 分科会総括..... | 29 |
| TABLE 1: THE GLOBAL REFUGEE CRISIS IN THE JAPANESE CONTEXT | 30 |
| TABLE 2: THE FEMINIST PERSPECTIVES ON WARS AND CONFLICTS | 35 |
| TABLE 3: FREEDOM OF SPEECH AND ITS RESTRICTION IN TODAY’S WORLD..... | 41 |
| TABLE 4: ECONOMIC GROWTH AND HUMAN WELL-BEING | 46 |
| TABLE 5: MENTAL HEALTH CARE - CREATING A MENTALLY HEALTHY LIFESTYLE FOR YOUNG PEOPLE -..... | 51 |
| TABLE 6: MARINE PLASTIC POLLUTION..... | 56 |
| 成果発表会 開催報告 | 63 |
| 日本文化体験..... | 65 |
| 東京近郊スタディツアー..... | 67 |
| 各種交流総括 | 68 |
| 第 4 章 終章..... | 70 |

第 1 章 序章

序文

団体理念

団体沿革

実行委員名簿

総合テーマ

序文

文責 中関令美

2019年8月21日から9月2日まで、第65回国際学生会議を開催した。本報告書では、会議の開催内容とその成果を執筆させていただいた。

弊団体は、1954年に第1回目の会議を開催して以来、世界平和への貢献、多様性の尊重、主体性の育成、そして社会への貢献を団体理念として掲げ活動をしている。2週間程の期間中、世界各国から集まる学生同士で共同生活を送り文化交流や国際問題について議論を行う学術交流をする。

65回目の会議を迎えた本年度は“Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow”（日本語記: 多様性の真価を享受する ～今を生き、明日を創る力として～）を総合テーマとして掲げた。世界15カ国から57名の学生が集い、6つの分科会に分かれ、国際問題について議論を行った上で解決策を提言した。作成した政策提言は9月1日に開催された成果発表会にて公に発信し、その後書面で外務省に提出した。

会議中は様々な背景を持つ学生同士が意見をぶつけ合い、多方面から国際問題について議論し合った。その過程は決して容易なものではなく、多くの参加者は互いの価値観の違いに戸惑い、言語の壁に時には苦戦し、様々な困難を経験した。しかし、そのような状況の中でも一人一人の意見を尊重し、協力し合うことで最終的には一つの提言をまとめあげ、国際社会に学生の意見を発信することができた。学生の提言は未熟で無知であるかもしれないが、学生も社会の一部であることに変わりはない。世界各国から集まった将来を担う若者たちの提言が今後の国際社会に少しでも貢献できるものとなれば大変嬉しく思う。

また、弊団体の活動は省庁、企業、財団、そして個人の方々などを始め、様々な方に支えられている。第65回国際学生会議の開催と成功にお力添えをいただいた全ての方々に心から感謝の意を表したい。

最後になるが、国際学生会議が来年度、そしてそれ以降も国際社会に少しでも寄与するものとなるよう、今後の発展を祈っている。

団体理念

当団体の理念として、大きく分けて世界平和への貢献、学生の主体性の養成、多様性の尊重、社会への貢献の4点が挙げられる。

当団体の最大の目的は、国際社会の繁栄と秩序の安定に寄与し、最終的に世界平和に貢献することである。平和は国際社会が長年追い求めてきた絶対的目標であり、社会の一員である個人個人が目標達成に向けて努力することが求められている。しかし、平和といっても一概に定義することは容易ではない。紛争やあらゆる対立がない世界を実現するだけでは十分とは言えない。そこで私たちは、近年注目されている人間の安全保障という概念を重要視し、誰一人取り残されない社会の実現こそが目指すべき世界平和であると設定する。そして、学生である我々が当事者意識を持ち、如何にして世界平和実現のために行動を起こしていくべきかを熟考する。

また、学生自身が主体的に物事を考え、行動に移す力を養うことは非常に大切である。自分たちの可能性に気づき、周囲や世界規模で起こっている問題に目を向けることで問題意識を高めることができ、創造的な発想や批判的な考察をする力を身につけることができる。当団体の取り組みの中でも、参加者がリーダーシップを発揮したり、自主的な判断をしたりできる機会を設定し、一人一人が主体性を養うことを促している。感受性が豊かな学生という時期に培った自信と経験は、参加者にとって将来に繋がる大きな糧となると信じている。

さらに、今日の国際的な環境において、多様性という要素は非常に重要である。世界中の多種多様な人々の交流において一人一人の個性や経験を尊重することは不可欠であり、多様性が受け入れられる社会の実現に尽力することは当団体の大きな使命の一つである。また、異なる文化や環境の中で生まれ育ち、多様な価値観を持つ学生たちの意見交換や交流は、参加者自身の知見と会議の議論の幅を広げる非常に意義の大きいものである。会議期間中の密度の濃い交流が、より多様な側面から考察された学術的成果を生み出すと考えられる。

忘れてはならないのが、一般社会において学生の立場と影響力はそこまで大きくないが、学生も社会の中で重要な存在であり、積極的な社会参加と社会貢献が求められているということである。学生の提言は未熟で野心的なものに止まるかもしれないが、社会的要因や国益等のしがらみに縛られない学生ならではの革新的な意見を大切に、実際の会議の成果を様々な形で社会に発信している。さらに、会議終了後にも会議で培った問題意識や探究心を継続させ、参加者自身がそれぞれの形で社会の原動力となっていくという自覚と責任を持つように呼びかけている。

団体沿革

- 1934年 第1回日米学生会議(国際学生会議の母体)
「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下、青山学院大学にて開催。
- 1941年 日米開戦により会議は開催されず。
- 1947年 第8回日米学生会議
戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、日本で開催。
- 1954年 第15回日米学生会議
アメリカで行われた会議を最後に日米学生会議は解消。
- 1954年 第1回国際学生会議
12カ国から84名の外国人が参加。28日間に渡り、東京、関西、北海道、仙台で開催。
- 1962年 第9回国際学生会議
団体代表者会議を新たに設置。以後の会議の充実と参加団体間強い結束を指す。
- 1968年 学生運動の影響で、日本国際学生協会の中央委員会が分裂。
- 1970年 第16回国際学生会議
国際学生会議の再開。
- 1990年 第37回国際学生会議
帯広市との協力により、市民の方との国際交流の体験を共にする。
- 2003年 SARSの大流行により、国際学生会議は開催されず。
- 2016年 第62回国際学生会議
ファイナルフォーラムで国連食糧計画駐日代表(当時)アンダーソン氏による講演。
- 2018年 第64回国際学生会議
史上最多23カ国から学生が参加。
ファイナルフォーラムで国連開発計画駐日代表近藤哲生氏による基調講演。
- 2019年 第65回国際学生会議
事前研修旅行期間を含めて8月21日-9月2日の日程で開催。成果発表会には講演者として国連開発計画駐日代表の近藤哲生氏とUNESCOアジア太平洋事務所長の青柳茂氏を招待。会議終了後には外務省へ政策提言書を提出。

実行委員名簿

第 65 回国際学生会議 (ISC65) 実行委員

| | | |
|---------|---------------------------------|------------------------------|
| 実行委員長 | 中関令美 | 慶應義塾大学 |
| 副実行委員長 | 古澤謙 | 東京外国語大学 |
| 財務 | 青柳識 | 慶應義塾大学 |
| 渉外 | 野路ちひろ | 明治学院大学 |
| 企画 | 山本千尋 | 首都大学東京 |
| | 友成咲良 | 神戸市外国語大学 |
| 総務 | 深田莉映 | 国際基督教大学 |
| | 山川春奈 | 新潟県立大学 |
| 広報 | 齋藤菜都実 | 創価大学 |
| | Do Hoang Hiep | 静岡大学 |
| 学術 | 角尾十和 | 創価大学 |
| | 金山雄樹 | 慶應義塾大学 |
| テーブルチーフ | Kanlongtham Damrongsoontornchai | 早稲田大学 |
| | Nguyen Pham Lam Phuong | University College Roosevelt |
| | Matej Mikašinović-Komšo | University of Zagreb |
| | Theeritsara Laopaiboonpipat | 創価大学 |
| | Tran Anh Thu | HUFLIT University |
| | 金山雄樹 | 慶應義塾大学 |
| カメラマン | 齋藤岳大 | 新潟県立大学 |

各支部事前研修旅行(事前 ST)実行委員長

| | | |
|--------|-------|--------------|
| 大阪 ST | 横井優樹 | 大阪大学 |
| 京都 ST | 辻川愛 | 立命館大学 |
| 神戸 ST | 橋本 滉 | 関西大学 |
| 名古屋 ST | 渡邊 大祐 | 南山大学 |
| 九州 ST | 佐藤正徳 | 北九州市立大学 |
| 岡山 ST | 中村梓 | ノートルダム清心女子大学 |

日本国際学生協会(I.S.A.)中央役員

| | | |
|--------|-------|--------------|
| 会長 | 宮本大輝 | 岡山大学 |
| 中央事務局長 | 山崎舞衣 | 武庫川女子大学 |
| 財務部長 | 内田 慶香 | ノートルダム清心女子大学 |
| 広報部長 | 川嶋ふみ枝 | 関西大学 |
| 派遣部長 | 工藤智恵 | ノートルダム清心女子大学 |
| 企画部長 | 古後水暉 | 南山大学 |

日本国際学生協会(I.S.A.)各支部支部長

| | | |
|-------|--------|------------|
| 東京支部 | 京坂光紀 | 慶應義塾大学 |
| 大阪支部 | 南恵理菜 | 奈良学園大学 |
| 京都支部 | 辻川愛 | 立命館大学 |
| 神戸支部 | 青戸多恵 | 神戸松蔭女子学院大学 |
| 名古屋支部 | 五十嵐瑞記 | 南山大学 |
| 岡山支部 | 植田七菜子 | 岡山大学 |
| 九州支部 | 西久保あゆみ | 北九州市立大学 |

総合テーマ

Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow

多様性の真価を享受する～今を生き、明日を創る力として～

文責 角尾十和

今、世界では Society5.0 や 5G などの革新的な技術により、新たな時代の幕開けが近づき、日本では、令和という新時代が到来した。しかしその中で、時代を逆行するかのようになり、移民やマイノリティーの排斥が支持され、ナショナリズム政党が政権を獲得している現実がある。多様性を真っ向から否定するようなこの風潮は、どこへ向かうのか。またその一方で、各国でグローバル化・ボーダーレス化による多様化が進み、「多様性の尊重」がうたわれている。単に多様性を大切にすることとは簡単だが、多様性の真価とは何なのだろうか。

第 65 回国際学生会議は、“Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow” (日本語記: 多様性の真価を享受する ～今を生き、明日を創る力として～) という総合テーマを定め、このテーマに基づき活動を行ってきた。事前研究期間を含む合計 3 ヶ月に渡る学生たちの活動の中で、6 つの国際問題について調査と議論を深めてきた。最終的には、それらの問題をいかに解決していくか、答えを探究し、政策提言書という形で社会に発信した。

世界から集った学生たちが、現代の青年として、深刻さを増す国際的な問題に、真剣に向き合い、互いの価値観の違いを超えて、1 つの政策提言を作り上げる。第 65 回国際学生会議では、世界中の合計 15 ヶ国から集まった学生たちが、2 週間弱に渡る共同生活の中で、様々な形で交流を深めてきた。バックグラウンドの違いを受容し、互いの価値観を積極的に発信、対話する力を磨き上げた。これらの活動によって生まれた成果は、将来的な世界平和達成へ向けた確かなる第一歩となると確信する。彼らは、5 年後 10 年後、その問題を解決する主体者となっていく。未来のグローバルリーダーとして国際問題に立ち向かっていく学生たちにとって、相手の存在を 100% 尊重し、価値観の違いを乗り越えた第 65 回国際学生会議での経験は、絶対的な糧になるに違いない。

国際学生会議の原点は、日米関係の悪化を危惧した日本の学生が渡米し直接対話の重要性を訴えたことにある。社会的な緊張が高まっている時こそ、「絶対的な平和のための対話」が必要であると考え、利害関係など、様々なしがらみから解放されたアクターとしての学生同士の対話の重要度はますます高まっている。確かに、学生は世界を知らない井の中の蛙かもしれない。学生が語ることは理想論であり机上の空論だ、と片付けられてしまえばそれまでである。しかしながら、私たち学生がこれからの未来を担っていく。これだけは覆すことのできない事実である。共に未来を創る仲間として、互いを尊重し、助け合いながら、未来へ前進する。それが国際学生会議の使命であると確信する。

第 2 章 事前活動

事前招集会
事前勉強会総括

事前招集会開催概要

文責 深田莉映

5月11日から12日にかけての2日間、日本在住の参加者に向けた事前招集会をオリンピックセンターで開催した。顔合わせを兼ねた参加者同士、そして実行委員と参加者の交流と、来る会議に向けての英語での議論をすることを主な目的としていた。また、会議の概要や大まかな流れの説明、東京近郊スタディツアーのコース紹介も行った。

交流面では、企画が実施したレクリエーションを中心に、参加者と実行委員も一緒にアイスブレイクや英語でのゲームを楽しんだ。また、食事の時間や休憩時間にお互いを知るための簡単な自己紹介やバックグラウンドの話に加え、テーブルトピックに関するアカデミックな意見交換をしている様子も頻繁に見られた。プログラム開始時は大半の人が初対面であることもあり、少々緊張している面持ちの参加者も多かったが、時間と共に緊張が溶けて活発になっていく様子もあり、終了後のアンケートでも顔合わせによって不安が少し和らいだという声も多かった。

分科会に分かれての顔合わせとディスカッションに加え、学術イベントとして、玉川大学の小林亮教授と共同通信社編集長の井田徹治様をお招きした。主に、小林教授からはユネスコの掲げる地球市民教育について、井田様からは海洋プラスチック汚染について英語での講演をいただいた。講演終了後は6つの分科会を2つに分け、講演内容に対する質疑応答に加え、ディスカッションを行った。各々、とても白熱した議論が交わされており、プログラム終了後も個々でお話をする参加者も多く見られた。英語でのディスカッションに慣れていない参加者ももちろんいたが、この事前招集会においてアカデミックな内容のディスカッションの場を設けられたことは、会議開催を前にした練習の機会としても、とても有意義な時間になった。会議までに英語のレベルを上げることに意気込みを見せる参加者も多く、海外参加者との英語でのディスカッションという漠然とした不安をやる気に変えられたという声もあった。

この事前招集会では参加者は4人部屋に宿泊し、寝食を共にしたことで、わずか2日間だったが、プログラムに加えたそれ以外の時間での交流も含めて、事前招集会の目的は達成出来たと思う。また、実行委員と参加者との間に壁を作らないよう、実行委員も積極的に参加者との交流に励んだ。参加者の参加意欲だけでなく、これまでメールやSkypeといった媒体を通してのコミュニケーション手段しかなかった実行委員にとっても、実際に参加者1人1人と実際に対面し、「参加者ファースト」でより良い会議を作り上げるためのモチベーションを改めて高められた貴重な機会となった。

事前招集会 プログラム概要

日程・場所

5月11日(土)~5月12日(日)
東京・国立オリンピック記念青少年総合センター

活動内容

学術セミナー・分科会議論・参加者交流

参加者人数

参加者 27名 (うち実行委員 12名)

| | | |
|----------|----|----------------------|
| 5月11日(土) | 午前 | オリエンテーション |
| | 昼食 | カフェテリアふじ(オリンピックセンター) |
| | 午後 | 学術セミナー |
| | 夕食 | 参宮橋周辺レストラン |
| | 夜間 | レクリエーション |
| 5月12日(日) | 朝食 | カフェテリアふじ(オリンピックセンター) |
| | 午前 | 分科会議論 学術企画 |
| | | 写真撮影・解散 |

学術セミナー総括

文責 角尾十和

本年度は、事前招集会（2019年5月11日・12日）にて、初の取り組みとなる学術セミナーを開催した。講師として、玉川大学小林亮教授と共同通信社井田徹治様をお招きし、お二人からの講演の後、少人数に分かれてのディスカッションの時間を設けた。

学術セミナーは、分科会テーマに関して参加者の知見、理解を深め、8月の会議に向けたスタートを切ることを目的として開催した。参加者が実際に各分科会トピックの問題解決のプロセスに入る前段階として、基礎的知見を得るため、講師の実際の活動経験、問題解決の事例を中心に、各分科会テーマに関連した内容等も含めた、幅広い分野に関して、講演していただいた。講演の後のディスカッションでは、ご講演の内容に関して、弊団体参加者の理解をさらに深めるため、小グループでの質疑応答を行った。

講演1：玉川大学 小林亮教授

小林教授はユネスコの掲げる地球市民教育を心理学的観点から研究をされている。また、スクールカウンセラーとしての資格を持ち、若者のこころの健康に向き合ってきた。今回の講演では、世界のあらゆる問題に対して、国連機関であるユネスコがどのように問題解決に挑んでいるのかという観点から、ユネスコの掲げる地球市民教育について講演していただいた。参加者からは、「小林教授の経験や知識に感銘を受け、将来自分に何ができるのかを考え直すきっかけになった。」という声があった。

講演2：共同通信社 井田徹治様

共同通信社の編集委員である井田様は、環境ジャーナリストとして環境問題について広く取材をされてきた。特に海洋プラスチック汚染についても専門家として、様々な場面で講演をされている。海洋プラスチック汚染に対して、各国政府、企業、民間の問題解決に向けた取り組みを中心にお話いただいた。参加者の中には、「海洋プラスチック汚染がこれほどまでに深刻だとは知らなかったし、日本が遅れていることも初めて知った。」と答えた人もおり、知見を深めるきっかけになった。

ディスカッション

小林教授には、分科会5のメンバーを中心とした参加者とディスカッションをしていただいた。井田様には、分科会6のメンバーを中心にディスカッションをしていただいた。両グループ共に、参加者から積極的に質問がなされ、予定時間を延長するほど充実したものとなった。

参加者交流総括

文責 友成咲良

事前招集会 1 日目の夜には、参加者同士の交流を深める場として、英語を使ったレクリエーションのプログラムを設けた。レクリエーション内容としては、いくつかのグループごとに分かれたうえで、参加者に関するクイズや各自が持つ情報をもとにして一つの作品を完成させるといったようなゲーム等を実施した。また、翌日のディスカッションがより活発になることを狙いとして6つの分科会ごとのグループでアクティビティをしたり、分科会以外の参加者同士でも十分に交流ができるように様々なグループでゲームに取り組んでもらったりした。

これらのレクリエーションについてのアンケート結果では、「分科会メンバー以外にもどのような参加者がいるのかよく知ることができた」、「英語でのレクリエーションは難しさもあったが、やりがいがあった」、「他の参加者についても、自分の新たな側面についても知ることができた」、「緊張が解けて、楽しむことができた」といったような感想が見られた。セミナーとは違った賑やかな雰囲気が緊張していた参加者同士を打ち解けさせ、レクリエーションの時間を通して、共に高め合っていく仲間であることの実感も湧いたのではないかと考えられる。

事前勉強会総括

文責 金山 雄樹

国内参加者が決まってから会議が開催されるまでの3ヶ月の間、国際学生会議では議論をより良くするため、分科会ごとに勉強会を開催している。この勉強会では主に日本人を対象として、事前知識の獲得と英語力の向上を目的として、月に一回ほどの間隔で開催した。そこでは、参加者同士で話し合うだけでなく、それぞれの分科会が取り組む問題に実際に関わってこられた専門家の方々をお呼びし、お話頂いた。実際にお越し頂いた、中野貴之様、高松香奈教授、Smith Nicholas 教授、武藤収様にはこの場を借りて御礼申し上げます。

事前勉強会には毎回多くの学生が参加し、各分科会のテーマに対して理解を深められたと考える。これは参加学生にとって、問題をより深く知ることの出来る良い機会になっただけでなく、会議に向け、良い準備になったと考えられる。特に、日本人は長年議論が苦手だと非難されてきたが、外国人参加者が議論に入る前に日本人だけで議論を行う機会を設けられたことは、日本人参加者の本会議の貢献具合を大きく変えたと考えられる。実際に、多くの日本人参加者が事前勉強会に満足するだけでなく、会議で積極的に発言する様子が伺えた。このような点から、事前勉強会は本会議をより良くするために役に立ったと考えられる。

この事前勉強会では、分科会ごとに大きく方法が異なったのが今年の特徴であるように思える。例えば、事前に課題を課し、その課題に基づいて議論をする分科会もあれば、勉強会中に課題を課し、その場で議論を開始する分科会もあった。また、英語が苦手な参加者の多い分科会では、英語の前に日本語でそれぞれの考えを共有し、その上で英語を使って意見交換をするなどの工夫が見られた。このように、学生ならではの知恵を用いて柔軟に事前勉強会の内容を構成している様子が多々見られた。また、今回の事前勉強会ではスカイプなどのサービスを用いて参加する海外参加者の様子も散見された。

まとめると、事前勉強会では参加者が各自のテーマに関して理解を深めるだけでなく、実際に働かされている方々をお呼びすることで、インターネット上では得られない知識を得ることが出来たと確信している。また、それだけでなく参加者にとって英語を使って議論することに慣れる良い機会になったと考えている。この事前勉強会を通じて、英語面でも、問題に対する知識の面でも、会議に向けより良い準備が出来たのではないかと実行委員一同考えている。

第 3 章 会議

概要
事前研修旅行
会議

概要

英語表記名

The 65th International Student Conference (ISC65)

会期・場所

事前研修旅行 8月21日(水)~8月24日(土)
(名古屋・京都・大阪・神戸・岡山・九州の各地で開催)
会議 8月25日(日)~9月2日(月)
(東京・国立オリンピック記念青少年総合センターで開催)

総合テーマ

“Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow”
(多様性の真価を享受する～今を生き、明日を創る力として～)

テーブルトピック

- Table 1: The Global Refugee Crisis in the Japanese Context
(難民問題への日本の貢献)
- Table 2: The Feminists Perspectives on Wars and Conflicts
(紛争地域における女性の権利)
- Table 3: Freedom of Speech and Its Restrictions in Today's World
(現代社会における表現の自由とその制約)
- Table 4: Economic Growth and Human Well-being
(経済成長と人間の幸福)
- Table 5: Mental Health Care
-Creating a mentally healthy lifestyle for young people-
(こころの健康を守る～若者がこころの健康を実現できる社会とは～)
- Table 6: Marine Plastic Pollution
(海洋プラスチック汚染)

公用語

英語

活動内容

国際問題研究・ディスカッション
日本文化体験・東京近郊スタディツアー
各種交流会・成果発表会

参加者人数

日本人学生 32 名(うち実行委員 12 名)
外国人学生 25 名(うち実行委員 6 名)
計 57 名

参加国・地域

日本、アフガニスタン・イスラム共和国、インド共和国、インドネシア共和国、クロアチア共和国、コスタリカ共和国、タイ王国、中華人民共和国、ドイツ連邦共和国、ナミビア共和国、パキスタン・イスラム共和国、バングラデシュ人民共和国、フランス共和国、ブルガリア共和国、ベトナム社会主義共和国

主催

日本国際学生協会 The International Student Association of Japan
(I.S.A.)

会議 プログラム概要

- 8月21日 事前研修旅行1日目(九州、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋の各地)
- 8月22日 事前研修旅行2日目(九州、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋の各地)
- 8月23日 事前研修旅行3日目(九州、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋の各地)
- 8月24日 事前研修旅行地から東京へ移動
- 8月25日 開会式
オープニングディナー
レクリエーション1
- 8月26日 分科会議論1
分科会議論2
分科会議論3
- 8月27日 分科会議論4
分科会議論5
分科会議論6
レクリエーション2
- 8月28日 分科会議論7
分科会議論8
中間発表
レクリエーション3
- 8月29日 東京近郊スタディツアー(Main Study Tour)
- 8月30日 分科会議論9
日本文化体験
分科会議論10
- 8月31日 分科会議論11
分科会議論12
分科会議論13
- 9月1日 成果発表会
フェアウェルパーティー
- 9月2日 閉会式

参加者名簿

| Table 1: The Global Refugee Crisis in the Japanese Context | | |
|--|------------|---|
| Syach Iskandar Muhammad | Indonesia | University of Indonesia |
| Wasim Abbas | Pakistan | Quaid e Azam University, Islamabad |
| Anthony Ramon Perez Soto | Costa Rica | Luther College |
| 青木 美奈 | Japan | 早稲田大学 |
| 小澤 夏菜 | Japan | 上智大学 |
| 中村 憲考 | Japan | 麗澤大学 |
| 萩原 寛人 | Japan | 早稲田大学 |
| Table 2: The Feminists Perspectives on Wars and Conflicts | | |
| Sulagna Banerjee | India | Ritsumeikan Asia Pacific University |
| Farah Masud | Bangladesh | North South University |
| 尾野 ひかり | Japan | 早稲田大学 |
| 佐々木 優子 | Japan | 創価大学 |
| 澤村 華乃 | Japan | 創価大学 |
| 津田 理沙 | Japan | 神戸市外国語大学 |
| Table 3: Freedom of Speech and Its Restrictions in Today's World | | |
| Angel Permata Jauhari | Indonesia | University of Indonesia |
| Kostadin Ivanov Dinkov | Bulgaria | University of Plovdiv "Paisii Hilendarski" |
| Mohammad Yasin | India | Jawaharlal Nehru University |
| Willy Antony | Indonesia | Padjadjaran University |
| 河畑 波恵 | Japan | 大阪大学 |

| | | |
|---|---------------------|----------------------------------|
| 小森 貴就 | Japan | 早稲田大学 |
| 三原 秀幸 | Japan | 創価大学 |
| Table 4: Economic Growth and Human Well-being | | |
| Laxmi Aeshwarya Kumar | Germany / France | University of Leeds |
| Luu Hue My Le | Vietnam | Kwantlen Polytechnic University |
| Maria Milcheva Shopova | Bulgaria | Imperial College London |
| Wenhan Shang | China | Wenzhou-Kean University |
| 坂口 絵梨子 | Japan | 東京学芸大学 |
| 高須 正美 | Japan | 創価大学 |
| Table 5: Mental Health Care -Creating a mentally healthy lifestyle for young people- | | |
| Helena Roswita Kurniasih | Indonesia | University of Indonesia |
| Yuri Kim | Indonesia | Hasanuddin University |
| 田村 奈緒 | Japan | 首都大学東京 |
| 小林 由奈 | Japan | 甲南大学 |
| 小松 正実 | Japan | 創価大学 |
| Table 6: Marine Plastic Pollution | | |
| Adbul Baess Keyhani | Afghanistan | Huazhong Agricultural University |
| Ayu Puspita Ningrum | Indonesia | Airlangga University |
| Kassian Tshithigona Tshiningombw Amesho | Namibia | National Sun Yat-sen University |
| Nurhan Nedzhati Fehim | Bulgaria | Medical University of Varna |
| 飯山 美幸 | Japan | 創価大学 |
| 浦邊 樹 | Japan | 岡山大学 |

| | | |
|--------|-------|-------|
| 小杉 日奈子 | Japan | 立命館大学 |
| 松永 心 | Japan | 創価大学 |

事前研修旅行総括

文責 中関令美

概要

事前研修旅行（Study Tours: ST）とは、8月21日から8月24日の4日間に渡り全国6箇所で開催された企画である。弊団体の母団体である日本国際学生協会(以下、I.S.A.)の各支部から集まった実行委員が企画及び運営を担当し、大阪、京都、神戸、名古屋、岡山、九州の各地で開催された。海外参加者は全員参加し、国内参加者及び、I.S.A.会員も任意で参加した。

開催目的

事前研修旅行の開催目的としては第一に、日本の魅力を参加者に実感してもらうことである。この事前研修旅行を通して、インターネット上やパンフレット上だけではわからない日本の魅力を海外参加者に伝え、国内参加者にとっても、新たな日本の魅力に気づくきっかけの提供を目指した。第二の目的としては、日本人学生と海外学生の交流の場を設けることである。共に観光をするだけでなく、事前研修旅行中だけには止まらない友情を築くことのできる場を作り上げることが目的とした。

総括

事前研修旅行は6箇所で開催され、各地特有の魅力を存分に参加者に伝えることを目的とした内容であった。有名な観光地だけではなく、あまり知られていない現地の方のみに知られている魅力まで様々な場所を訪れ、海外参加者だけでなく国内参加者も日本の魅力を再発見できるかけがえのない経験となった。また、参加者は現地の I.S.A.会員の家にホームステイをすることで、現地の方との共同生活も楽しむことができた。事前研修旅行を終えた参加者は充実した思い出とともに東京に移動し、その後の会議にも真剣に臨んだ。短い期間であったが、国内参加者と海外参加者は国籍を越えて友情を築き、一生の思い出になったようであった。

最後に、この事前研修旅行の成功を支えていただいた、各事前研修旅行の実行委員、I.S.A.会員、そして参加者のホストをしていただいた方々をはじめ、全ての方々に感謝を申し上げる。

事前研修旅行紹介

大阪 ST

文責 横井優樹

大阪 ST は実行委員 5 人を中心に開催された。参加者は日本人が 8 人、海外参加者が 6 人であった。1 日目は、まず始めにアイスブレイク企画としてインディアンポーカー、山手線ゲーム、神経衰弱を行なった。その後扇町公園へ移動し、スポーツ企画を開催。昼食は得点の高い班から弁当を選んでもらった。大阪くらしの今昔館で海外参加者には着物を試着してもらった。夕食は宿泊場所で手巻き寿司パーティーを開催し、各自好きな手巻き寿司を製作してもらった。夕食後花火をした。2 日目は、カップラーメンミュージアムに行き、マイカップラーメンの製作体験を行なった。その後、大阪城、造幣局を見学した。夕食はたこ焼きパーティーを開催し、ラムネを飲んだりもした。3 日目は、まず住吉大社を参拝し、絵馬に願いを書いた。海外参加者にはお守りをプレゼントした。昼食後、食品サンプル製作を体験した。今回はたこ焼きの食品サンプルを製作した。自由行動では、各自お土産を買ったりゲームセンターに行ったりしてリラックスした時間を過ごすことができた。フェアウェルパーティではメッセージを書いて色紙を完成させた。スケジュールがタイトかつ歩く時間が長かったため途中体調不良者も出たが、終始楽しい雰囲気でき互いに交流することができた。日本人参加者や海外参加者から楽しかったという声や感謝の声を聞くことができ、満足すると同時に、大阪 ST を運営することができて心から良かったと実感した。当初の目標通り、見学や体験を通して、大阪あるいは日本の文化や歴史を五感で十分感じてもらえたプログラムであったのではないと思う。



京都 ST

文責 辻川愛

京都 ST は実行委員 2 人、日本人参加者 4 人、海外参加者 3 人で開催された。「京都の魅力を再発見！～日本文化に浸る旅～」を今年のテーマとして掲げ、京都に来たことがある人でも京都の新たな魅力を発見でき、楽しむことができるような企画を考えた。1 日目は、錦市場で食べ歩きをした。ここでは、日本人がよく知っているお漬物や魚料理などを海外参加者と一緒に食

べ歩くことで、海外参加者が日本の食文化を知る機会を得るとともに、日本人参加者が日本食を普段と少し異なった視点からみる機会にしようと考えた。2日目は、茶道体験をした。茶道体験では、茶道を通して日本人のおもてなしの心を学んだ。海外参加者が、自分の国にもお茶はあるけれど、茶道という文化は日本特有で、とても素敵なものだと言っていて、日本文化の良さを知ってもらう良い機会になったと考えている。日本人参加者にとっても、普段触れることのない茶道を体験することで、日本文化の良さをたくさん感じる事ができた。3日目は、伏見稲荷を参拝した。伏見稲荷は千本鳥居で有名な神社だが、海外参加者だけでなく、日本人参加者の中にも初めて訪れたという人がいて、海外参加者、日本人参加者ともに楽しく参拝することができた。STの日程を通して海外参加者に日本の良さを知ってもらうことはもちろん、日本人参加者にも、日本または京都の魅力を再発見してもらうことができた。



神戸 ST

文責 橋本滉

神戸 ST は実行委員 7 人、日本人参加者 9 人、海外参加者 3 人で開催した。1 日目は神戸で有名な灘の酒造跡を見学した。海外参加者は日本独特のお酒の味や作り方に興味津々だった。次に、青少年会館でアイスブレイクをした。企画担当が考えてくれた内容のおかげで、その場にいた人たち全員が楽しめる笑顔の絶えない楽しいものになった。夕食は豆の畑という場所でビュッフェ形式での食事を行った。豆腐などを使ったヘルシーなものが多く、参加者はお腹一杯食べていた。神戸は歩く街ということもあり疲れていたのか、みんな宿に着いてすぐに眠りについた。2 日目は有馬温泉に行き、ミッションゲームをした。各々温泉街で食べ歩きをしたり、温泉に入ったりして、体を癒した。温泉に入る文化のない海外参加者が楽しんでくれるか不安だったが、入ったことの無い彼らだからこそ気づく視点で満喫していました。夜は三宮にあるご飯屋さんで夕食を食べた。ワンプレートの食事だったが、ボリュームもあって美味しかった。3 日目は、最終日は日本の時刻が決まる標準時子午線が通っている街、明石へ行った。博物館で明石の文化を知り、プラネタリウムを鑑賞したあと、各グループで自由に行動した。意外にも神戸に住んでいながら明石に来たことがないという人もいたのでテーマにしていた兵庫を再発見するということが達成できた。バリええで HYOGO がテーマだった。それぞれの観光地が離れていて疲れないか心配していたのですが、幸いにもみんな疲れを見せずに楽しんでくれた。今回は外国人に人気の場所を候補から外し、なかなか行く機会のない場所にも訪れた。私

自身は神戸に住んでいないが、実行委員達の柔軟な対応に助けられ、何事もなく終わることができた。



名古屋 ST

文責 渡邊大祐

名古屋 ST は実行委員 3 人、日本人参加者 4 人、海外参加者 2 人で開催した。一日目はお昼過ぎに名古屋駅に集合し、その後、中村生涯学習センターでアイスブレイクとミニ畳作り体験をした。ミニ畳作り体験では畳を作るだけでなく、畳に関する様々なことを教えてもらうことができた。夕食は料理企画を行い、あんかけスパゲッティとブラウニーを作った。二日目は海上タクシーを使い佐久島に行った。佐久島では、海で遊んだり、写真を撮ったりした後、全員でご飯を食べた。昼食は天井や釜揚げしらす丼などそれぞれ好きな丼物を食べました。そのあとのグループ行動では自転車に乗って島を散策し、いろいろなアートで写真を撮った。夕食は名古屋駅に帰って、きしめんを食べた。三日目は大須観音と大須商店街に行った。大須観音でお参りした後、大須商店街で昼食をとった。また、名古屋市科学館にも行った。名古屋市科学館では電気や竜巻、錯覚などを体験しながら見て回ることができ、加えてプラネタリウムも見ることができた。最初の目標ではのんびりとした余裕のある ST にしたかったが、離島や商店街など移動が多く、また、急遽科学館に行くことになり、かなりハードスケジュールな ST になってしまった。また、会期中に疲れたという声も何度か聞いた。しかし、船に乗って離島に行くなど名古屋に来るだけでは体験できないような貴重な体験もできたと思う。結果的に、とても楽しい ST になった。



九州 ST

文責 佐藤正徳

九州 ST は実行委員 9 人、日本人参加者 8 人、海外参加者 3 人で開催された。1 日目は北九州市立大学で参加者同士仲良くなるためにスポーツ企画としてバレーボール、水鉄砲合戦をした。午後からは小倉駅周辺でのミッションゲームを実施し、班ごとに昔ながらの市場や商店街を回った。夜はフリータイムにし、大半はお好み焼き、数名はうどんを味わった。宿泊先はホスト宅だったため、大学周辺に戻り、1 泊目は解散とした。2 日目は朝集合し、小倉城に行った。お茶の立て方や作法を学び、実際に和菓子とお茶をいただいた。海外参加者はもちろん日本人参加者でも知らないマナーが多くあり、とても新鮮な体験ができた。昼は大学に戻り、そうめんをお昼ご飯として食べた。昼食後は貸切バスで福岡市の方へ向かった。宮地嶽神社に到着後、フリータイムとし、神社の参拝やお土産通りを散策した。かなりの炎天下だったがあまり参加者から疲れは感じず、実行委員も元気に楽しむことができた。夜は博多、天神地区に行き、班別で夜ご飯を食べた。中洲の有名な屋台に行ったり、ラーメン屋さんに行ったりなどし、福岡らしさを味わうことができた。その後、宿泊先の民泊へ向かった。3 日目は、午前中に宿泊先を出て、太宰府天満宮に向かった。学問の神様や神社周辺の自然、お土産通りが有名で、参加者の笑顔をたくさん見ることができた。その後大学へ帰り、BBQ を実施し、花火やビンゴゲームで盛り上がった。今年は「九州で吸収」をテーマとして掲げた。九州の美味しい食べ物、大自然、参加者同士のコミュニケーションなどを通して多くの事を吸収することができた。また、体調不良者も出ることなく、実行委員と全ての参加者が楽しむことができた。



岡山 ST

文責 中村梓

岡山 ST は実行委員 9 人、参加者 16 人にて行われた。1 日目はクオーレ倉敷ホテルでウェルカムパーティーをして親睦を深めた。お昼ご飯はこのホテルでビュッフェを食べた。午後からは、倉敷美観地区を班になってミッションゲームをしながら観光した。倉敷名物である「むらすずめ」を作る体験をした。観光中に各自お土産なども買った。夜ご飯は、梅の木で味噌カツ定食を食べた。2 日目はホテルを出発して、バスで牛窓へ行った。まず、牛窓オリーブ園に行った。フォトジェニックな場所でみんなゆっくりと過ごした。名物のオリーブソフトクリームを食べている人もいた。その後牛窓港へ行き、前島までフェリーで移動した。カリヨンハウスという研修所へ行き、筏漕ぎのレクチャーをしてもらった。すごく良い天気だったので、海に入ると気持ちよかった。筏はみんなの力を合わせて進んでいくので、ここでもみんな仲良くなることができた。少し疲れも見えたが、みんな楽しんでた。3 日目は朝、ノートルダム清心女子大学で文化体験（折り紙）をした。折り紙の起源なども話したので日本人も新たな発見ができた。その後、フルーツバスケットをして、3 日間の感想を言い合いました。お昼は、お好み焼きを食べた。その後、後樂園や岡山城に行きフォトジェニックコンテストを行った。フェアウェルパーティーはスポーツカフェで行った。3 日間の思い出のムービーを流して ST を締めくくった。岡山を選んでよかったという声を参加者から聞くことができ、とても満足している。また、岡山にもう一度来たいと思ってもらえた ST になったと思う。アットホームな雰囲気でありつつオシャレなホテルや、普段なかなかやらない筏漕ぎなど様々なことが体験できたプログラムになった。参加者の皆さんはもちろんのこと、実行委員も楽しめた ST になった。



会議総括

文責 古澤謙

第65回国際学生会議は、“Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow”（日本語記：多様性の真価を享受する ～今を生き、明日を創る力として～）を総合テーマとして掲げ、8月25日-9月2日の日程で東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにて行われた。プログラムに関しては、例年同様に参加者の学術交流と文化交流に重点が置かれた。

学術交流は、6つの分科会に分かれ、分科会ごとに議論と研究が展開された。国内外から生まれや価値観、経験が異なる参加者が集まったため、実際に議論を進めたり、その議論の内容を形にしたりすることは全てが順調に進んだわけではない。しかし、テーブルトークや学術的知識、研究経験、言語能力等で自信を持つ者が議論を引っ張り、参加者全員の議論への積極的参加を促すことで、各分科会が特色を持った活発な活動を行なった。会議が進むにつれて参加者それぞれが自分なりの議論への貢献方法を見出し、自信をつけていったように感じられた。また、5月以降の会議準備期間も含め、会議に際して分科会活動において多くの専門家にご協力をいただいた。その協力は分科会テーマに関する講義や作成中の政策提言に対する客観的なご意見等であったが、どれも研究経験が豊富とは言えない学生が研究活動を行う上で非常に有益なものであった。これら学術交流の成果は、会議終盤の9月1日に一般公開で開催された成果発表会でのプレゼンテーション発表と9月5日に行われた外務省への政策提言書の提出によって社会に向けて発信された。

文化交流は、日本文化体験、レクリエーション、東京近郊スタディツアーを中心とした各種交流を通して実践された。「国際」学生会議を名乗るものの、日本で会議を開催する意義も考えながら、当会議は参加者が日本の文化に触れ合う機会の提供に力を入れている。今年もそれを狙いとして、ソーラン節と書道体験で構成された日本文化体験と、会議中日に日本の文化や東京の街を紹介する東京近郊スタディツアーが行われ、参加者からも非常に高評価をいただいた。また、レクリエーションにおいては、有志の参加者が自国の文化を紹介できる機会や参加者がより多くの参加者と話ができる機会を設け、国際相互理解の促進や将来に渡って続く友情関係の構築を目指した。その他にも、オープニングディナーや外食企画、お祭りへの参加を通して参加者同士の交流の機会があった。

会議自体は1週間強という短期間であったため、学術的な成果についても文化交流を中心とした国際交流についても、参加者全員が満足のいく十分なものであった訳ではない。しかし、会議での経験は会議期間中に止まるものではなく、参加者それぞれが困難を乗り越えたり自信をつけたりすることで、これから先の学生生活やその先の人生において重要な経験や気づきを得られたのではないかと考えられる。そして、自身が多様性溢れる世界の一員であり、社会の明日を創る存在であるという意識を新たにしていれば幸いである。また、65回目を迎えた国際学生会議もまだまだ発展途上である。学生の可能性を最大限に生かし、社会に大きな影響を与えられる学生団体となるべく、今後の国際学生会議の発展に期待したい。

分科会総括

文責 金山雄樹

極端な考えが世論を操作する傾向にある現代社会において、相手の意見を聞くことの重要性は日々増すばかりであるように思える。物事の一つの側面にだけ着目するのではなく、広い視野を持ち、物事を大局的に捉えられるような人材が求められている。その点において、専攻や文化など異なる思考基盤を持つ人々と一つの問題を議論することは、今後必要とされる経験の一つであるように思える。

「社会の原動力」となる多様な学生が集まった第 65 回国際学生会議では、生まれ育った国の文化や慣習だけでなく、参加学生の専攻や学年さえも大きく異なっていた。このような環境下で議論することは、参加学生にとってかけがえのない経験となったであろう。参加学生の背景が大きく異なるからこそ、対立が議論の中で生じ、新しい解決策をもたらすことができたのではないかと推測する。この会議に参加した学生が、異なる背景を持った相手の意見を聞くことの難しさと同時に大切さを実感すれば、より良い社会に向け一歩前進したと言えるのではないだろうか。

今回の会議では、現代社会が直面する 6 つの課題を議論した。その 6 つとは、日本における難民問題、紛争地域での女性の人権、オンライン上での表現の自由、経済発展と人間の幸福、若者のための社会の創出、海洋プラスチック問題である。分科会 1 では、日本における難民問題を取り扱った。日本政府の難民に対する態度が国際社会から批判的となっている中、この分科会では法の改定だけでなく、収容所の生活環境の改善なども必要であると提言した。分科会 2 では、戦争下において無下にされがちな女性の権利に警鐘を鳴らし、政府や軍隊への女性の参画が解決策となると主張した。分科会 3 では影響力を強める偽報道に対して既存の関連団体の強化並びに、SNS などを運営している企業との連携強化を唱えた。分科会 4 では経済発展に伴い生じる問題の中から、環境問題と所得分配に焦点を当て、インフラストラクチャの整備や研究機関の強化を解決策として掲げた。分科会 5 では、若者が不安を打ち明けやすい社会を構築することを目的として、教育環境の改善と政策の精緻化を求めた。そして、分科会 6 では海洋プラスチック問題を解決する、その一歩として日本政府にプラスチックの他国への輸送を止めるよう提言した。

これらの分科会では、問題を各自で設定し、各国から集まる多様なバックグラウンドを有する仲間達と議論する中で、それぞれの問題に対して政策提言という形で解決策を社会に提示する。その過程の中で、時に衝突し、時に譲歩を強いられる場面もあったと推測するが、この経験が参加学生全員にとって実り多きものとなったのであれば、会議運営者としてこの上ない喜びである。

Table 1: The Global Refugee Crisis in the Japanese Context

Table chief: Kanlongtham Damrongsoontornchai

Introduction

According to the UNHCR, in 2017, at least 65.6 million people were forcibly displaced worldwide due to persecution, conflict, violence, or human rights violations. The persisting Global Refugee Crisis has become an issue of global attention. Japan, often dubbed as the most "homogenous society", has one of the world's toughest asylum policies. Despite having the third-largest economy, Japan has accepted only 20 refugees in 2017, less than most developed countries across the globe.

As the outcome of the intense discussions at the Main Conference, Table 1 has ultimately composed a policy proposal which aims to address the global refugee issue with a special attention on the Japanese society. To address the current situation of the refugees in the Japanese society, i.e. poor treatment of the detainees in the immigration center, lack of systematic distribution of refugees, and marginalization of refugees from the society, Table 1 has come up with three proposals as follows:

(1) *Assurance of the Well-being of the Detainees in the Immigration Centers:*

From various news reports, we recognized that a substantial number of refugees and refugee applicants in Japan are faced with difficulties, including the harsh living conditions inside the immigration centers and they are deprived of basic human needs. Therefore, there is a necessity for the government to address this issue based on the humanitarian grounds.

(2) *Introduction of a Refugee Quota System for Local Governments:*

From our studies on refugee settlement allocation policies in countries with large intake (e.g. Germany), our aim in introducing a quota system is to suggest a method of allocating refugees based on the income level of host communities. Through this, we consider the possibility of accommodating refugee settlers in the public welfare system in the long term.

(3) *Promotion of a Social Integration Program:*

We recognized a strong potential for various locals in Japan to implement the social integration program which promotes the well-being of the refugees and upholds the value of diversity as part of the undertaking. This could be achieved through the provision of the language training program, vocational training, and annual cultural exchange program.

Although we recognize that several areas of concerns incorporated into the policy proposal may appear as idealistic and premature due to several limitations, we sincerely hope that this proposal can serve as a groundwork to propel further research and discussion on refugee well-being, reallocation of refugees, and social integration, especially in the context of the Japanese society in its current form.

Business Report

At the outset of our undertaking, the topic of the Global Refugee Crisis has been selected the table topic since we envisioned this topic to spark scintillating and thought-provoking debates whereby many pros and cons, as well as opportunities and risks revolving around the issue are to be further explored. As the International Student Conference invites participants from both within Japan and overseas, this topic calls for both Japanese participants and international participants alike to examine the circumstances of the current affair together and, ultimately, come up with a policy proposal which embraces a multiplicity of perspectives. We imagined that the idea that we put forward to the society should be innovative and genuine, since our enterprise sought to incorporate the diversity of opinions from a group of young, motivated students who are of a diversity of cultural and academic backgrounds, as well as the exposures vis-à-vis the Global Refugee Crisis.

Inviting the participants to explore various inquiries, for instance, how we should distinguish the terms such as refugees, migrants, and asylum seekers from one another, what would be the opportunities and challenges for host country in taking in more refugees, to what extent is Japan willing and able to receive more refugees, and what are the problems that the Japanese labor market is currently facing etc., we anticipated that these prompts will be able to connect the issue of global concern with the local relevance in a meaningful way. Even though the Global Refugee Crisis is an issue that caught the attention of the media and the academia worldwide, hardly any attention has been given to the issue by the Japanese society. Venturing with this issue, therefore, we hoped that this will encourage the participants as well as the public to discuss further and to come up with a solution which is beneficial to the society at large. Furthermore, since our topic is interdisciplinary, it invited students of many fields to come together and find a solution which brings the best benefit to the society.

As part of the preparation towards the Main Conference, our Japanese table members physically would usually gather in Tokyo and foreign members would be joining the meeting via Skype. Leading up towards summer, there were three video conferences in total. The first meeting, held in June, was aimed at giving the background of the topic to all the table members. Before the meeting, they were asked to read different news articles both in Japanese and English, mainly about the current updates on the topic of refugees. Table members were then asked to make a short list of points that they found interesting or worth discussing. Apart from the assigned task, we welcomed Mr. Takayuki Nakano, the President of NPO Piece of Syria to our meeting. Upon this encounter, table members got the opportunity to listen to a brief lecture about the Japanese perspectives on the refugee issue as well as the activities that NGOs have been engaging with thus far. Furthermore, table members got to ask questions to the guest speaker and hear more from an expert with first-hand experience.

The second meeting, held in July, was aimed at giving the opportunity for table members to acquire an overview of the issue from a global perspective. In preparation for the meeting, they were assigned to create a presentation about a refugee crisis or refugee-related topic in a country or a region

of their choice. In the meeting, following the individual presentation on the case study of selection, a follow-up discussion was held. The case studies ranged from France, Germany, Syria, Southeast Asia to Japan. From this task, we compiled points that were effective and limited in different cases, in the hope that this information will be helpful in the development of the policy proposal.

The last meeting, held in August, was aimed at bringing the topic of global relevance into the Japanese context. The task that accompanied the meeting was to have each table member roleplay different stakeholders in the Japanese society as they gather for a hypothetical telecasted debate show. The imaginary character list ranged from taxpayers, NGOs, student activists to refugees. From this task, we got to see the multiplicity of opinions that are out in the society, however, not necessarily aligning with the intention of our project. This reminded us that our undertaking cannot be full of ideals, since it must be applicable in the real world and public consent is as important when drafting a policy proposal.

Finally, in the last week of August, all the table members gathered in Tokyo for the Main Conference. In retrospect, although the progress of the entire discussion went as expected, that is not to discount that the entire journey went smoothly. There were several challenges that we had to overcome as a table. It was not until halfway into the conference that we finally decided the scope of application. A considerable proportion of time was spent on identifying the area of concern and delegating the tasks. However, that also had its perks; it has, in turn, given us a stronger foundation of the discussion. The table members also coordinated with each other with a variety of tasks very well. Although the research and the composition of the policy proposal was stressful at times, they have always been supportive of each other and there is nothing more refreshing than to witness the formation of new friendship.

Manifest from the adventure we had together, Table 1 was loaded with hope for a peaceful future and the motivation to become a change in the world. Although the conference has already ended, I am confident that my table members are going to carry on the vision they have as a participant to the obligations they will have in the future beyond ISC and be a meaningful contribution to society at large in the near future.

Participant's Essay

萩原寛人

私は、2019年の8月25日から9月2日までの第65回国際学生会議の本会議に参加させていただきました。5月に行われた書類選考から始まり、テーブルチーフ、サブテーブルチーフとの面接があり、さらに約3カ月間の勉強期間が設けられた後に本会議を迎えました。これらを経ていく中で、ISCと他活動との両立の難しさを感じると同時に、始まって間もない大学生活に充実感を齎してくれました。そうしたあまりの多忙さに喜びを覚え始めたころ、体が悲鳴を上げ、体調を崩しがちになり、様々な歯車が少しずつずれていったような気がします。参加したかった2度目の勉強会に参加できず、体調を崩し、塾講師のアルバイトを後ろめたく感じ、3度目の勉強会にも出席することが叶いませんでした。そのせいか、テーブル内での自分の立ち位置が分からなくなり、本会議中もぎくしゃくすることが多々ありました。議論でも、自分の英語力の低さも加わり、さらに自分の主張がしづらくなっていきました。しかし、この悩みが解消されていったのは、議論以外で行われた、海外参加者や日本人参加者との深い交流です。それは、湯船の中での腹を割った会話、一人部屋に10人以上が詰め込まれ談話したり、オリンピックセンター外での食事、朝の4時まで続いた、ベンチでの歓談まで派生します。こうした交流が、会議中の悩みや緊張を紐解いていってくれました。これは、議論やファイナルフォーラム、異文化交流企画に匹敵するほど大切なものだと思います。これこそが、私にとってのISCでの最高の思い出の一つです。

テーブル1の提言に対する私の意見としては、難民受け入れ後の生活への言及に加え、さらに難民受け入れの数を増やす方法についても少々言及すべきだったと思います。もちろん、議論の時間が限られていたため、仕方がないことだったかもしれませんが、受け入れ制度の拡張は難民問題を考察する上で不可欠であると思いました。しかし、難民受け入れ後の生活に考慮した提言書は非常に完成度が高いように感じました。これらが私の提言書に対する意見と改善可能な点だと思いました。次に、もし提言書が社会に反映されれば、難民管理局に住んでいる難民認定待ちの人々はもちろん、難民認定後の生活、難民認定された人々が産む「難民二世」にも多くの良い影響が出ると思います。さらには、日本人に欠けているとされる、異文化交流、多文化共生の意識の改革にも繋がり、先進国としての大きな一歩となると思います。

私は将来的に、新しい国際報道機関を設立したいと考えています。大まかな内容としては、世界各国からのジャーナリストを集め、多角的な視点から今ある社会問題を取材、発信していくというものです。こうした志があることから、ISCでの外国人参加者との社会問題についての議論をするという活動は、自分の志に対する課題と希望を同時に教えてくれました。これらを参考に今後の大学生活やその先の活動に存分に生かしていきたいと考えています。私は、自分の報道、発信が、世界中の一人でも多くの人に、自分の反対側にいる人々の気持ちを考え、行動に移す糸口となってほしいと考えています。そのためには、早稲田大学在学中にできる限りの知識や価値観、人脈を自分の中で構築し、海外を含めたメディアでのインターン、場合によっては大学院への進学、学生ジャーナリスト団体の設立を経て、自分の将来に繋げていけたらと思います。ISCでの活動は、自分の物事への見方、分析能力、人との接し方など、将来に大き

く影響する多くのことを学ぶことができました。ここで得ることができた縁を今後も大切にしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

Table 2: The Feminist Perspectives on Wars and Conflicts

Table chief: Nguyen Pham Lam Phuong

Introduction

Drawing on the ethnographic and phenomenological approach to studying wars, violence, conflicts, Table 2 has approached wars and conflicts through the lens of gender power relations and gender roles as well as social norms.

In understanding the relation between social, political, economic processes forged by wars and gender relations, we can better understand the position of women in such context as well as the problems faced by women which can persist into peace time.

The stories about wars and conflicts often revolve around fighting, strategies and casualties. This is not only a rationalized but also a gendered narrative of wars and conflicts: women become the silent/invisible population within these narratives. History does not include women's stories and voices. Moreover, typical war stories assume women without any agency: men create wars and women are helpless victims. While, in fact, during wars and conflicts, women take on many different roles e.g breadwinners, doctors, fighters, traders, factory workers, etc. and thus coping with the situations, creating their own new multi-layered identities as well as world views.

The above-mentioned stories also celebrate the army, which includes mostly men: the romanticized images of men sacrificing themselves for a higher purpose, the portrayal of a strong and powerful men and who went through very harsh experiences. This leads to an image of "how men should be and act" and creating the image of men as a strong, powerful, protective figure, associated with public realm.

The portrayal of men is highly inter-related to the portrayal of women: if men are the powerful figures, then women should be the soft, gentle figure who stay behind (not in the front line of wars like men), the ones to be protected by men and support the men. This process can further reinforce traditional gender roles and ideals of the society.

Following women's lives and positions during wartime points us to the informal extra-state economy – which proliferates during time of chaos and can persist into peace time. During wars, the situation often induced women into prostitution – for example, chaos, lack of living resources and also lack of jobs for women because men's jobs, such as male soldiering, are more valued during wars. Women are either forced into prostitution due to outside circumstances or forced by men to serve their needs – in many cases, the reasons can be both.

Moreover, illicit industries such as prostitution also serve the conduct of war financially thus it is often sustained by the authority in time of war and backed by transnational illicit economic networks. Similar industries and trading include gems, gold, drugs, petroleum, etc. – all of which finance from weapons, medicines, machines and other necessities for fighting the war to daily life necessities such

as food. Even after wartime, these industries and illicit trading are sustained by the authority to recover the nation from scratch, keeping military alliances and continue financing the army.

Business Report

Wars and conflicts have great impacts on gender ideals, identities and power relations. The stories about wars and conflicts often revolve around fighting, strategies and casualties – a very gendered narrative of wars and conflicts. Women do not only become the silent/invisible population within these rationalized narratives but are also forced into certain roles and prescribed characteristics by political, social, economic processes during wartime.

Table 2 approached this topic on both the material and the discursive, ideological aspect.

To understand the variety of war processes and the cultural, social constructions of gender created by them, three assignments were given to participants, in which participants were asked to read certain excerpts from academic articles and answer questions. The first assignment was about the sex industry during and sustained after wartime as well as the construction of hyper-masculinity by military conscription in South Korea. The second assignment discussed militarization, as both a material and a discursive process, in the United States. The third assignment is an excerpt from our mentor's, professor Sheftall (Shizuoka University), work on Japanese women during World War II and how the state circulated discourses on gender to mobilize the female population in line with political goals of waging war. Lastly, there was an optional fourth assignment about Vietnamese women during and after the Vietnam war in which the relation between politics, culture, society and traditions can be observed. Through all the assignments, participants have a better understanding on concepts such as masculinity/femininity, along with the framework of our table – relations between war political, social, economic processes and culture, traditions coming together to regulate gender norms and roles.

We then started with a 3-month long holistic research on two case-studies: South Korea and Syria. Our table was divided into two sub-groups and each was responsible for one case-study. Once in every two weeks, each sub-group had a report meeting with the table chief and sub-table chiefs to discuss their findings, concerns, questions and receive feedbacks from the table chief. Reading materials were also provided from the table chief, although the scope of research is not limited to such materials.

After having a clear understanding of the two situations, at the start of the Main Conference, we compare and contrast them with one another – from which we conclude the nature of our topic and the common problems. It is evident from both case-studies that during wartime women often face gender-based violence e.g domestic violence, rape, prostitution, forced early marriage and lack of necessities e.g healthcare, food. We concluded that such occurrences were due to (1) financial reasons, either for everyday-life survival or for the government to finance their war/army; and (2) gender bias caused by militarization. In the end, we concluded that militarization was at the core all the problems.

From there, while keeping in mind what we learnt from the two case-studies, we brainstormed possible solutions to overcome the impacts of militarization on gender. We considered (1) reduce budget on the army, (2) reconsider economic sanctions on war-stricken countries, (3) increase participation of women in the military and political decision-making institutions, (4) educate the army

on gender issues and (5) educate the public (a) to eradicate gender stereotypes so that everyone can be more accepting towards having women in the military, and (b) include women's stories during wartime in history textbooks. At the same time, we did research on militarization tendencies around the world and different stakeholders' positions on, interests in militarization. Different stakeholders considered include the government, the military, NGOs, the public and education institutions. After examining the advantages and disadvantages of each stakeholders for each solution, we decided to propose solution (3), supported by solution (4) and (5) – since solution (1) and (2) are unrealistic.

I am content that all members of Table 2 have been very hard-working, dedicated and supportive to one another throughout the whole process. Everyone showed great interest in this topic as well. Most of our discussions were efficient, fruitful and everyone, both Japanese and international participants, always felt comfortable sharing opinions. I am also content that we always managed to recap and summarize our progress to ensure everyone was on the same page. Table 2 members were very active as well – always asking questions, sharing ideas, taking initiatives. Sometimes, members can have fruitful discussions and brainstorm together with minimal intervention from table chief or it seemed sometimes that the line between members and table chief/sub-table chiefs did not exist at all.

Nonetheless, Table 2 also faced some difficulties. Members often find it difficult to make time for preparation works before the Main Conference. Even during the Main Conference, members also have other obligations outside ISC, e.g university works, other projects, etc. Keeping a comfortable, relaxed and friendly discussion environment is a crucial element, but it was difficult at times because members can feel tired and worried about finishing policy proposals. Table 2 members felt that way as well, but we made sure that all works were conducted within the given discussion sessions and that nobody had to do extra works outside discussion sessions – so everyone had sufficient time to rest. Table-bonding time was also incorporated between discussion sessions e.g dancing and going out to help everyone de-stress and get to know one another better.

Participant's Essay

Hikari Ono

Concerning the conference

I cannot believe that it has been more than two weeks since the last day of ISC65, but I also feel that it is long time ago.

Reflecting on the 9 days of ISC, the most memorable moment was the final forum. It was my first time to make a speech in English on a big stage, but surprisingly, I did not get nervous than I expected. I usually get worried when I have to speak in front of many people, but this time, I was more confident than nervous. I am sure that my confidence came from preparation and atmosphere of ISC. After a lot of research and discussion, even though I sometime got lost why we were searching this and why we are talking about that, we got deep insight about our topic and managed to make a proposal. Now I understand that none of the research we did was useless, and it made our discussion more layered. Besides, the environment of ISC made me confident to make a speech. When I first applied for ISC, I thought that other members would be too serious and hard to get along with, but when I first met committee members, I realized that they are very friendly and open-minded. I was really impressed how ISC people are nice and eager to learn many things, and that made me relaxed to make a speech. I will not forget how everyone was passionate with each topic.

I hope our proposals will lead to change the current situation that women are marginalized from the literature of war and conflict. Even though I have learned about conflict itself, there were a lot of things that I knew for the first time about how both men and women suffered in terms of gender. Therefore, I wish that our proposals will make more people aware of this issue. Especially for Japanese government, I wish they would change the curricula on history to learn more about women in conflict. Even though there is a controversy on comfort women, it should be included more to promote understanding of this problem. At the same time, however, I think a part of our proposals might be hard to apply to Japan. Our main target was military, and it is hard to discuss with Japanese government because we have a complicated argument on whether the Self Defense Force is a military or not. As we used the term "military", I think that the Japanese government may frown on our proposal. We could be more careful about the literature. Therefore, if we could change our proposal, I would discuss what kind of word we should use, or I would change where we submit a proposal. The case of Japan is really complicated, so it might be easier to submit not to the Japanese government but other government or NGOs.

Beyond the conference

From our table discussion, I learned the process of building a solution in a team. During the conference, we first decided what is the core and stakeholders of the topic, then we defined the problem, and we moved on to the proposal. This process was so clear that all of us could understand why we are

making this proposal and what we should focus on. This thinking process was a big learning from our table chief, and I will apply to my studies.

I decided to participate ISC because I was interested in addressing inequality of the world. However, because of the stressful job-hunting recently, I sometimes got lost what I really want to do in the future. From discussion and interaction with people with other background, I strongly felt that I really want to work globally to engage in international cooperation. I do not know whether I can realize it or not, but ISC helped me to realize what I really want to do.

I am not sure about the what kind of value I want to create in my life. However, as I was really grateful that I could meet wonderful members, I would like to connect the value of each people and widen the circle of people. I think that important thing to achieve this is to meet a lot of people with keeping in mind that I should have an objective perspective. I am glad that I participated in ISC65, and I am sure that this is not the end of the story.

Table 3: Freedom of Speech and Its Restrictions in Today's World

Table chief: Matej Mikašinović-Komšo

Introduction

With the introduction of the internet, the debates on Freedom of speech have expanded to include the digital Freedom of speech as well. This aspects of Freedom of speech is endangered by the current rise of online Fake news – by flooding the public political discourse with false information, the Right to information is severely damaged, reducing the quality of the national political discussions and political ideas, therefore placing democracies into great peril.

The Main conference discussions culminated into a proposed solution for the pollution and destruction of the Right to Information, caused by Fake news. The proposed solution suggested combining already existing journalist institutions (International Federation of Journalists) and social media service providers (Facebook, Twitter) on a global, national and local level, in order to create a strong, relevant and independent organization. The IFJ would have its focus enlarged, in order to include detecting and combating Fake news, by working closely together with NGO's, SMS providers, independent researchers, public policy experts and national governments (national governments would have a supportive role). Together, they would oppose Fake news on three levels – global, national and local:

- Global – The listed subjects would work together in order to determine and define global guidelines on how to identify, define and oppose Fake news. Also, SMS providers would work on combining their services with the data from IFJ, in order to improve the easy of obtaining information on the reputation and truthfulness of various news pages and articles.
- National – National Journalist organizations and unions would work together in order to create a national context for the global guidelines implementation (each country may have its own internal specific logic, so they may need unique guidelines). They would also collect national data on Fake news, which would be sent to the global level for examination, in order to conclude the quality of the global guidelines.
- Local – The nationally contextualized global guidelines would be implemented on this level, both by local journalists and interested civilians. This implementation would also serve as a way of testing the quality of the guidelines and its implementation potential. The inclusion of civilians acts as a way to increase civic participation and knowledge.

The proposed solution is only a starting point. Its purpose is to act as an example of a potentially unique and different solution to the dangers which Fake news impose for Freedom of speech – both online and offline. Therefore, it is up to the mentioned subjects to change and improve this suggestion as they see fit, in order to secure a bright future without Fake news.

Business Report

The purpose of the preparations before the Main conference discussions was to make the Table members bond (both as team members and as friends), to help them obtain the needed basic knowledge of the topic and to help them prepare for the discussions. As decided by the Table Chief, the topic of Table III was from the beginning Freedom of speech and its restrictions in Today's World. It was selected as a topic for multiple reasons. Firstly, it was seen as a relevant topic in today's times. Secondly, it was selected because it is a topic relevant for all countries in the world – due to that, potential participants could be found in the entire world. Thirdly, the topic is open to discussion from multiple positions and academic perspectives, which made it interdisciplinary. In total, Table III had three online meetings through Skype, with the intent of preparing the table members for the Main conference discussions. The first one, held on May 20th, was used in order to have the table members introduce themselves to each other, and to explain how the Table will be organized before and during the conference and what the Table will be doing for preparations. An introduction to the topic, prepared by the Table Chief, was handed to all Table members, in order to bring the topic closer to them.

The second one, held on June 27th, was used as an introduction to the discussions, by having the Table Chief do a short presentation on the potential directions of the topic, which was followed by a general discussion on the topic. At the end of the meeting, a paired assignment was handed to the Table members. Participants were paired (one foreign and one Japanese) and asked to write a general comparison of their countries. A list of questions to be answered was prepared before hand by the Table chief.

The third one, held on July 15th, was focused on the results of the pair assignment. Each pair presented their conclusions, and finished the meeting by discussing our findings. Upon finishing that assignment, it was asked of the Table members to have a vote between them on which direction we should deal with. Based on the preparations, given articles and their own preferences, the Table members voted, and Online Freedom of speech was selected as our direction of the topic. With the direction decided, the continuation of the pair assignment was prepared, which required the same paired teams to now compare their countries based on the direction of the topic which we chose – Online Freedom of speech. The same pairs were asked to now use the before made general comparison of their countries, and determine how similar/different they are when comparing Online Freedom of speech.

Before the conference, the Japanese participants gathered every month to research together Freedom of speech in Japan, in order to bring that knowledge and insight to the discussions. This was especially important since two out of three Japanese participants didn't chose Table III, but were rather given the option of entering it (due to Table III having no Japanese applicants). Therefore, helping them learn about Freedom of speech in Japan was seen as a perfect way of introducing them to the topic. The Japanese participants meet four times in person before the Main conference in Tokyo, in order to work

on the assignments prepared before hand by the Table Chief and Table Sub-chief – once for the Advanced conference in May, and three times (once in June, July and August) in general. For the Advanced conference, the purpose was for the Japanese participants to introduce themselves, as well as discuss a set of prepared questions about the topic. For the June meeting, they were all given the task of researching and presenting the history of Freedom of speech in Japan, after which they had to discuss its development. For the second meeting, they were further asked to discuss the topic. For the third meeting, they watched a movie about Freedom of speech, after which they had to discuss it.

All of these preparations were made in order to prepare the table members for the Main conference discussions, held at the end of August in Tokyo. Working together, Table III attempted to detect problems which endanger Online Freedom of speech and the issues that they cause, in order to conceptualize a potential solution. Throughout the difficult, but engaging discussions, Table III singled out Fake news as a important problem of Online Freedom of speech, and in the end managed to come up with a solution to it, that was seen as both plausible and well-made to implement.

However, that is not to say that the road to this positive conclusion was only smooth sailing – various problems arose during the discussions. The direction of the topic (determined by the team during the Summer preparations) might have been too broad and difficult to tackle in such a short time. It's difficulty also limited the possibility of Japanese participants discussing it more. The scope of the discussion also made it difficult to create a clear daily agenda and concrete discussion – which is why a lot of time was spent on discussion about abstract concepts and ideas. Only in the last two days has Table III managed to clearly specify the scope of the problem, which enabled it to create a clear research and solution.

Looking past the problems faced, it is the conclusion of this Table Chief that the Table III members were not only capable, focused, organized and hard-working, but also compassionate, friendly, calm and pleasant. This Table Chief was blessed to have such a team, due to each member being competent at certain relevant aspects of preparations, discussions, conceptualization and agenda setting, this helping this Table Chief when he himself was having trouble leading the team. This enabled the team to work as one. There is no doubt for this Table Chief that each and every member of Table III has a bright future ahead of them, and that, if they show the same amount of dedication, hard-work and compassion as during the conference, there is nothing they won't be able to do.

Participant's Essay

Namie Kawabata

Concerning the Conference

Reflecting upon my days at ISC, the most memorable experience for me is simply meeting each participant. I genuinely enjoyed being able to meet and talk to every person. I can say this for two reasons. First, I appreciated that the committee members were able to create such an open and friendly environment for the entire conference. Even in May, I knew that participating in this student conference would allow me to find a new family. Thanks to the committee members, each of us warmed up to each other right away, and we were all able to talk frankly with one another and get to know each other. Second, I was truly able to be myself around this group of people, which made it easier for me to connect with others. Most of the times when I am meeting new people, especially speaking in Japanese, I get nervous and I worry about how other people think of me. However, by knowing that ISC does not use formal language despite age differences and by knowing that the people participating in ISC are more open minded and understand English, it made me relax and stay calm.

My personal opinion about my table's proposal is that the problem identification and the background section was succinct and well defined, but the actual proposal and solution section was not well thought out. As a table, we spent much time identifying the problem, and I was proud that we were able to define it and narrow it down. I believe that this section of the policy proposal was easy to understand. In addition, we added many case studies from around the world to back-up our points. However, as a table, we were unsure as to what to do for the actual proposal section. In reality, I think it is necessary to include information such as budget, timeframe, etc. for the feasibility of the proposal, but this time, we were only able to list out our ideas and give vague answers.

I would change how we go about creating the policy proposal. Each participant needs to understand what a policy proposal is and what a policy proposal entails. Most of us have never written a policy proposal before, so without prior knowledge, we cannot begin to write a proper proposal that is worthy of submission to any state government.

The most that I can hope for is that my table's proposal will bring more awareness to the issue of fake news on the Internet. Fake news is prevalent everywhere, so it is necessary for netizens to be able to discern accurate information from the false and misleading information. I hope that eventually in the future, social media companies will also take more action to combat fake news and preserve the importance of accurate information and the freedom of speech. In addition, I hope that governments will not take advantage of the trend of fighting fake news. I hope politicians will not use "suppressing fake news" as an excuse to suppress the freedom of speech in their nations or for certain groups of people in their nation.

Beyond the Conference

ISC has reaffirmed my goal in changing the way “international” is seen across the world. In today’s world, we are moving towards using the term “global,” but often times it is hard to understand whether “international” and “global” are synonyms or if they point to different concepts. To me, “global” is more inclusive and refers to the world as a whole. On the other hand, “international” refers to interactions between nations. To me, I would like to see the world as a more “global” place, where people can understand and relate to each other as humans, rather than becoming caught up in nationality, gender, birthplace, or ethnicity. I hope to change the notion that “international cultural exchange” is only about the differences we have among our backgrounds; I want to also be able to celebrate our similarities and understand that at the end of the day, we are simply human.

Even before the main conference began, I knew that a new value of mine is to put myself and my health first. All too often, I bend myself backwards and forwards to achieve many different goals and expectations. However, this typically resulted in compromises in my mental and physical health. I overstressed myself to the point of anxiety, and I frequently caught colds. This is why I tried my best to go to bed early throughout the entire main conference. However, even then, I still developed many canker sores throughout the conference, presumably from stress, lack of sleep, and lack of nutrition. As my next school semester starts, I am conscious about protecting my mental and physical health. By keeping my health first, I wish to improve my quality of life.

Table 4: Economic Growth and Human Well-being

Table chief: Theeritsara Laopaiboonpipat

Introduction

— Happiness, well-being, and prosperity: The case of Japan and the Kingdom of Bhutan

This paper aims to investigate the current state of affairs in Japan relating to the notion of happiness, well-being and prosperity and the importance of these concepts within the social, political and economic life of the Japanese people. To achieve an accurate and complete overview of the notion of prosperity the paper first provides an overview of the two main indices that deal with these concepts – GDP and CNH. These indicators capture the complex relationship between explicit, quantitative economic data and implicit and difficult to describe changes in more qualitative and tacit notions relating to happiness and well-being. Furthermore, the paper introduces a contrasting example with the country of Bhutan where happiness and well-being are major priorities of both lawmakers and citizens. By comparing both countries against their respective performance in the indices chart, the research presents key insights about the relative performance of each country and identifies potential areas of improvement and recommendations for the Japanese government, the business and interested parties from the nongovernmental which are also the main audiences this paper seeks to address and engage with.

— Growth and Environmental Degradation: The transport institution as a contributor to air pollution in South-East Asia

This research paper aims to critically examine how to combat contemporary challenges of environmental degradation in developing countries caused by air pollutants such as greenhouse gas emissions. The area of research shall concentrate on South-East Asian countries, predominantly Thailand, Indonesia, and Philippines since these regions exhibit homogeneity in environmental decline caused by toxic emitter. In these countries such air pollutants emanate from multiple economic sectoral activities. However, the authors shall specialize on an in-depth analysis of the infrastructure and transport sector in the focus regions. Methodology of this research shall incorporate constructing a theoretical framework, supplemented by practical policy examples derived from multiple developed and developing states such as China and Germany. Furthermore, the analysis shall aim to issue relevant policy recommendations to be implemented by the focus countries with an aim to positively influence infrastructure development and simultaneously mitigate environmental issues caused by greenhouse gas emissions. Such policies may include modes of private-public partnerships as well as mechanisms of South-South Cooperation.

Business Report

The topic that I decided was broad and not specific. However, I did not regret of doing so because at the end, we decided the topic's scope and direction together based on the collection of our opinions. All of the decision that I made came from the intention to accomplish my objective of establishing life-long friendship as everyone gain experience and knowledge culturally and academically through the discussion. However, the difficulties of this approach were that the preparation before the main conference may not be that useful during the conference and the intense discussion during the main conference will be inevitable, because we have less time but have to meet the deadline of each submission. Nevertheless, observing from other table chief progress during the conference, even they were well-prepared, the discussion and research yet still can be difficult due to the other factors including team members and the familiarity of the topic.

Regarding my preparation before the main conference, I decided to divide into two sub-topics under the context of issues related to the economic growth and human well-being, since I think that having 8 members engage in discussion may not benefit both of the team and individual progress, in terms of efficiency and productivity. These two sub-topics included economic growth and environmental issue, and economic growth and subjective well-being. As the two sub-topics went into a completely different direction, assisting both team in the same time is challenging. Additionally, each team chose to write their own paper, which double the work for everyone. Based on my last year experience (ISC64), I felt that unexpected things can happen, thus, team management skill and an ability to manage your stress while keeping up with a good working atmosphere are required. In the other words, be well-prepared is important but dealing with an actual situation while keeping everyone happy is the matter that should be considered most. Based on ISC 65 table chiefs, the progress was delay according to everyone's schedule. Therefore, based on this vision and attitude, I guided members and took the lead only when it is necessary, in order to make them feel that this is the productive output of their efforts.

In the beginning, I opened up the discussion on the focus of the topic and clarify the deadline that we have to meet so that they have an overall image of our movement. Basically, it was about the channel that we can submit, the format and requirements (In this part, Table Chief needs to corporate with the Table Management at first place before starting everything, since submitting policy proposal is not something random but we have to consider about the 'call for proposal'. However, publishing on some journal is also applicable but this option has not yet been paved by anyone in ISC). The pace of my table work really depended on the member's contribution, which can be risky and stressful for table chief as everything may not be under my control. Any day that had long working hours, I would add some games, team build-up workshop or frequent long break during the discussion session. Above all, reflection after the whole day of discussion and research was necessary for members to catch up with others and to evaluate one another progress. This reflection contained questions that require each

member to personalize which would be useful skills for everyone in the future and also the team building. Apart from this, what I did for most of the time is preparing my knowledge, I step on all the possible content in general, as to get myself ready to support everyone on whatever direction they chose.

Lastly, as a table chief, knowing everyone's capacity is important because as a table chief, you may have to cover the members' work. This includes rewriting people's work and guiding and including member's opinion. The toughest part is rewriting and also may include the grammar check. However, because in this year, proposal is only 10 pages so actually, you can form a structure and plan how many pages to write in each section. It is obvious that quality paper will require language ability and well understanding on the topic. However, one thing that I realized is that table chief has to do a lot of behind the scene work. After all, I was confident on our Table paper and believe that I had achieved both of my ultimate goals as a table chief.

Participant's Essay

Laxmi Aeshwarya Kumar

This essay concerns the 65th International Student Conference (ISC) which was held in Japan end of August to beginning of September 2019. The purpose of this paper is to critically reflect on the experience made with ISC, inclusive of a reflection of the research outcomes. Furthermore, this brief essay shall shed light on how ISC might have impacted my future aspirations. First and foremost, my overall experience with ISC has been a rather positive one, where I have had the opportunity to learn about the Japanese culture from Japanese students and professionals. I highly value such initiatives as they offer a great opportunity to build global networks with students from diverse cultural and academic backgrounds.

This diverse approach could also be found in our research paper which was conceptualised by academics from the field of law, economics, business as well as political sciences. Our table topic focused on economic growth and human well-being, which we further broke down into the two main clusters namely, economic growth and environmental degradation and economic growth and happiness. Thus, since we had basically divided the topic into two main parts, we also divided the team into two groups and each group was working on their assignment individually. I was assigned to the group for economic growth and environmental degradation. Our research paper, with its geographical focus on South East Asia, identified air pollution as one of the main challenges. Since economic growth inaugurates a broad number of different sectors, we have decided to focus on the transport sector since statistics unequivocally demonstrate that there is a direct link between transport and air pollution in South East Asia. Transport as means for labour mobilisation as well as method to facilitate exports and imports at the same time also is a contributor for economic growth. Our research paper critically examined the status quo and subsequently highlighted two main policy recommendations which could help improve the air quality and foster sustainable economic growth.

The first recommendation urges government agencies and policy makers to increase stakeholder engagement, with special emphasis on public-private collaboration. The second recommendation refers to participating and utilising international cooperation mechanisms. Projected on the transport sector, this would mean that government agencies should utilise the efficiency and expertise of the private sector through public-private partnerships in order to restructure existing transportation and infrastructure facilities. Furthermore, government agencies should consider international cooperation mechanisms for i.e. funding purposes, for example through South-South Cooperation which could at the same time help strengthen foreign relations to other developing countries. I personally agree with these recommendations, as I think they are applicable not only to the transport sector but moreover universally applicable to most sectors contributing to economic growth. I thus retain the view that our ideas could be very relevant in contemporary policy approaches and hope

that our research outcomes would be able to positively contribute towards finding appropriate solutions to encourage sustainable economic development and at the same time could help to foster a multi-stakeholder governance approach.

At last, I would also like to reflect on how ISC has impacted my future aspirations and what I wish to change or contribute in future. Apart from offering a great global student networking opportunity, my participation at ISC has certainly demonstrated to me that I wish to continue working in the field of multilateralism. I highly enjoyed critically discussing our table topic and trying to collaboratively find solutions to the identified challenges. I would thus, at some point in my future career, aspire to work in the field of research. In my life I would aspire to work towards a cause that carries weight and is impactful. Impactful in the sense of improving lives of vulnerable groups with special focus on females. The ISC table discussions and outcomes which were presented at the final forum, have overall identified very similar core issues and gender inequality unfortunately remains one of them. As a young female myself, I thus aspire to work towards creating equal opportunities for females, especially in developing countries. Although my table topic did not directly concern gender issues, it is also applicable to economic growth and human well-being, if examined from a perspective of social inequalities. Therefore, if there would have been anything I would change or improve about our research paper, I would have probably opted to change the overall direction to include such gender perspectives in our analysis.

Table 5: Mental Health Care - Creating a mentally healthy lifestyle for young people -

Table chief: Tran Anh Thu

Introduction

Physical changes on the body are normally obvious and easy to be seen. Therefore, what is happening visually are more acknowledged compared to mentally. However, like a drop of water onto the surface, **mental problems** are less cared about as they might seem like “no big deal”. However, eventually, those little drops erode the ground like how mentality matters have overtaken one’s mind.

Depression, disorders or any mood related problems come like a sudden wind. First people feel fine with being touched by them, but little by little, the cold comes gradually. As a result, people are sick just due to that lightly wind at first. Another serious issue that comes with this problem is how the sufferer tends to stay silent and try to get through matters all by themselves. The problem being stigmatized itself has also led to the status of people rather keeping silence than speaking up. This status has also worsen the problem. Nonetheless, sustainable development of a society or community can only be achieved when its achievers stay firm and strong until the end, until the goals are reached. By firm and strong, it includes both physical and mental factors as “a strong mind can only appear inside a healthy body.”

Mental health problems have been and surely will be problems that are normally neglected, not only by those who do not care, but also by the patient himself. It is sad how a lot of people think mental care is not as important as physical care and display of an unhealthy mind is just pretentious. In fact, that is not true. More and more young people are suffering from depression, anxiety or mood disorder. If the initiative is not taken now to change the perception about it now, then when?

Business Report

During ISC65 Main Conference time, Table 5 had discussed and taken deeper researching on mental health related problems with the question “Where” for Japan and the “Who” for Japanese students, especially high school and university students. The final result of the 13 discussions was not excellent due to the lack of time and major of each member, however, some remarkable notices were listed out and contributed to the final Policy Proposal of Table 5.

Below are the aimed and reached items for the work of Table 5 during ISC65:

| Days | Aimed goals | Reached goals |
|--------------|--|--|
| Day 2 | <p>Morning:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Get everyone familiar with each other • Set team’s rules • Research on “Stress among students in Japanese context” →Share in team <p>- Afternoon: Main, final current situation of Japanese students with stress + Causes break down</p> <p>- Evening: Current Policy analysis</p> | <p>Morning:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Get everyone familiar with each other • Share their goal at ISC • Set team’s rules • Research on “Stress among students in Japanese context” → Share in team <p>- Afternoon:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Each team presents their work on the whiteboard • Share and compare the answers →Find out the main, final current situation for the team • Watch videos → Members share their thoughts; Is it the same with what they have researched earlier? Any adjustment? • Potential causes break down → Into details →Reach to the final root for the whole team <p>- Evening:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Research on Current policy: Good/Bad → How has it been? → Still continue? • Research on other countries with the policy for mental health problem <p>Compare → Pick up the good from theirs</p> |
| Day 3 | <p>- Morning: Survey (reality) + Policy (theory) comparison</p> <p>- Afternoon: Policy proposal</p> <p>- Evening: Writing tasks assignment</p> | <p>- Morning:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Go over the survey result →Pick out notices • Have each team work and analyze the data • Each team presents their work →Q&A <p>- Afternoon:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Work on analyzing the current policy: Finalize what article/objective to be proposed • List down and note <p>- Evening:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Finalize the outline |

| | | |
|--------------|---|--|
| | | Assign task to everyone |
| Day 4 | <ul style="list-style-type: none"> - Morning: Finalize suggestions for the Proposal - Afternoon: Assign writing task and prepare for Interim Report | <ul style="list-style-type: none"> - Morning: <ul style="list-style-type: none"> • Have each team discuss and present their suggestion for the proposal • Role play: Each team read and comment the other team's work under a role of a MOFA staff • Finalize the article - Afternoon: Assign writing task and prepare for Interim Report <ul style="list-style-type: none"> • Ask for everyone wanted writing task • Design outline for the Interim Report <p>Make PPT</p> |
| Day 6 | Morning only: Complete phrase 1 of writing the Policy Proposal | Have everyone follow their assigned tasks → Proofread → Revise 1st time |
| Day 7 | <ul style="list-style-type: none"> - Morning: Complete the Policy Proposal - Afternoon: PPT preparation - Evening: Rehearsal | Have everyone follow their assigned tasks → Proofread → Revise last time |

Participant's Essay

Yuri Kim

Reflecting upon your days at ISC, what was the most memorable experience for you?

Spending two weeks with ISC was a blast; I enjoyed everything except the tropical heat of course. It's hard to pick only one moment but if I had to choose it'll be our group's discussion and final forum. Mental health issues have been one of many things I'm concerned about in my daily life. I would love to do something more about it than just raising awareness through social media and helping people coping with their mental health on daily basis even though most of them are my friends. ISC65 help gave me a chance to raise my voice. On our first discussion session each and every one of us opened up and bravely share their story and struggle with mental health. When it was my turn I couldn't help but cry because I was the last person but never had I felt such comfort, everyone just hugged me and welcome me in a way nobody ever did during my first years of struggling with mental health issues. I could never forget that touching moment. Every discussion sessions were very fun and productive and I'm grateful that we actually got to present our ideas in front of really important people. I'm happy that we could raise our voice and share our ideas to help make the world a better place through a policy proposal that the ministry will actually read. But, the bottom line is every little moment in ISC is memorable and unforgettable memories that I would cherish forever.

What are your own personal opinions about your table's proposal?

I'm quite satisfied with the results of my table's proposal. I like that everyone is contributing and trying their very best to make the proposal supported with as many facts, data, and research as possible. I personally think that it's well written despite the short amount of time to actually write them. I think it's good that we got to discuss the current situation also policy to the government to actually show that what they're doing at the current status quo is still not enough, and we also propose some reasonable solutions according to us to help make the situation better. I know it's not perfect because it was made by a bunch of undergraduate students in such short amount of time but I think that it's great that we can provide some solutions from the perspective from those who actually suffer from mental health issues.

What would you change in the proposal and why?

If I could change something I would probably add more explanation regarding mental health issues. The government missed the point that suicide is mainly a consequence of multiple mental health issues. They want to tackle suicide because they think that it's the root of the problem but it actually isn't there are so many mental health problem that we study in medicine but not a lot of people know them thoroughly lest we explain it to them. I would also like to explain why people suffer from mental health problem in the first place from a more scientific perspective. Most people suffer from depression not because they're not "strong enough" but their brains are actually hardwired to feel depressed due to

hormonal imbalance etc. I would love to explain that more but we can't put everything in only 10 pages. I also would like to change one policy about school time; I found that most newer research already support that school should start around 10/11 am and 4 days school are better than 5 days but I still need to learn the philosophy of Japanese education before I propose to include that in my table's policy proposal.

What kind of change do you hope your table's proposal will bring?

I hope that through our policy proposal and presentation we can show the government that what they're doing is not enough right now because they're not tackling the right issue and the main root of the problem, which is stress. We hope not only that Japan can reduce the number of young people suicide but also create a better environment to actually prevent mental health issues and mentally healthy environment that could support those who already suffer from mental health problem.

How was ISC affected your future goals?

ISC has affected my future goals in a lot of ways, but mostly because of the time and talk I had with all other participants. Everyone has a very unique perspective on life, which has expanded my horizons. For example, my goal for 2021 is to do well during my hospital training and would postpone any other activities other than a few that I'm already involved with now, but after ISC my plan changes and I plan to go back to improve myself and try to make a difference. Also, before all I care about is illegal medical practitioner issues but after several talks with a certain participant I now realize there are so many other issues I didn't even realize is happening. For example many medical doctors, medical students, and residents suffer from overworking and some even die due to overworking. Overworking has a bad effect on service given and doctor's ability also focus. I didn't realize I could try to do something more about it instead of just complaining.

What kind of change or value do you want to create in your life, and what are the specific steps in realizing them?

I want to stop being to harsh on myself. I'm such a perfectionist sometimes I'm too hard on myself that it makes me afraid to actually start something because I'm scared if it's not perfect and I think of myself as less. I need to change my perspective if it isn't perfect I should fix it and try to be better next instead of whining about it and let it beat me.

Table 6: Marine Plastic Pollution

Table chief: Yuki Kanayama

Introduction

The topic of this table is Marine Plastic Pollution, which is discussed heatedly by almost all countries ranging from advanced economies such as Japan and Germany to developing countries such as Rwanda. The reason for this issue receiving attention is that the demand for this material is shown to increase as a country develops. Thus, it is estimated that the consumption of plastics will dramatically increase in a few years. This increase in the demand for this material is largely dependent on the characteristics of this material. In other words, this material is cheap, convenient, durable and easily accessible so this is now essential to the economic growth in many countries. However, plastics have a significant impact on our lives in a negative way. Although the demand rises dramatically, it does not lead governments to improve the quality of the management system. Therefore, a lot of plastic waste is flowing into the sea, damaging marine creatures. Basically, this is what drove us to tackle this issue.

In this conference, the participants joining this table decided to focus on the plastic waste exported by developed countries to developing countries. You may wonder why this topic is related to the issue. Actually, this is one of the biggest factors leading to the mismanagement of the plastic waste, and thus, a leading cause for this issue. Since developing countries are lacking in appropriate management systems which are necessary to manage a lot of plastic waste coming from developed countries, the amount of the mismanaged plastic waste is getting larger every year.

This issue is not easy to solve since those developing countries which accept the plastic waste are driven to do so in order to receive foreign currencies, which are important for them. Those foreign currencies produced from the trade are used to attract foreign companies or advanced technologies from developed countries. It facilitates the economic growth, encouraging them to import the plastic waste.

On the other hand, developed countries are taking advantage of this relationship at the expense of protecting the environment. Please note that developed countries have disposal systems which are not utilized in most cases. Therefore, we believe that it is important for developed countries to stop sending the plastic waste to those developing countries in order to tackle this issue. Although it is easier said than done given the current situation where developing countries are also benefit from this relationship, this must be done as soon as possible so that we can solve this issue.

Japan is not exempt from this issue caused by the trade. In fact, Japan is largely responsible for this problem as one of the biggest exporters of the plastic waste. Japan had sent a large amount of plastic waste to China until 2016, when China imposed a complete ban on the import of the plastic waste. It leads Japan to send the waste to other developing countries such as Indonesia and Malaysia. This causes a serious problem since, as mentioned above, those developing countries are not equipped with management systems necessary to dispose of the waste in a proper way. That is why we decided to focus on Japan as a target country in order to solve this issue.

As a proposal, we would vociferously recommend that the Japanese government stop sending the plastic waste. If it puts an end to this trade, it is highly likely that companies will be required to look for alternatives to plastics, which results in a desirable cycle. In order to protect the environment, we still have so many things to do. It is time to take steps.

Business Report

Table 6 discussed Marine Plastic Pollution, which endangers not only marine creatures but also human beings. The members participating in this table have various academic backgrounds. Some people are studying for their master's degree in this field. On the other hand, others who are in undergraduate programs major in completely different subjects. This characteristic made the discussion much more exciting and interesting. Thus, I believe the discussion we had in this conference was fruitful. For those who study this problem in detail at graduate school, it was interesting for them to listen to those who major in different fields. One of the participants told me that the conference had been beneficial for him since he had gained new perspectives on this issue. On the other hand, students who do not study this issue in detail at school must have been excited during this discussion since they found new facts every time they discussed this issue. Therefore, I believe that the discussion was intriguing for every participant.

Before talking about our activities, let me explain about marine plastic pollution. The consumption of plastics has been increasing every single moment but we do not know where plastics go after being used. I am wondering why we do not know where plastic waste goes. It dawns on me that the reason is that a lot of plastic waste is heading to developing countries, where plastic waste is mismanaged on a large scale. As a result, marine creatures are severely affected by mismanaged waste. When I decided to discuss this issue at the conference, almost everyone was ignorant of this issue, including me. That is why I wanted to talk about this issue with other students so that we can teach people how pressing this issue is and how to deal with this problem. Now, this issue is receiving attention and governments around the world are taking action in order to prevent this issue from getting worse. Although many people in Japan are still using plastics on a regular basis, the government as well as companies are gradually moving forward. Thanks to young, passionate and motivated students who joined this table, we finally made it public in the form of the policy proposal. I hope this proposal will change the people's behavior and the future of plastic waste.

Our activities consisted of two parts. The first one was study sessions which were held monthly, including the advanced conference in May. In these sessions, we mainly read a lot of articles and prepared for the conference. After reading numerous articles, we discussed some issues related to the policy proposal. Those issues included "whether taxes on plastics will work or not" and "whether education for children about the impact of plastics will solve this problem or not." These issues were essential to the policy proposal since they must be discussed in the proposal. I am pretty sure that these study sessions were quite useful for those who joined these sessions in that I made sure that these study sessions covered almost all issues related to plastic waste. The other part was the main conference. In this part, unlike the study sessions, I mainly supervised what was going on by letting participants discuss this issue freely. As I had expected before the conference, they discussed a lot so I believe that this

discussion must be a great opportunity for students to exchange their ideas and opinions. Although there were a lot of conflicts along the way, everyone seemed satisfied with the content of the policy proposal.

As a conclusion, let me put my thoughts on this issue. This issue must be solved at once since it could accelerate global warming as well. Therefore, plastics pose a serious challenge to the environment as well as human beings and animals. Despite this fact, we are literally surrounded by plastics and it seems to most people that it is common for us to use plastics only once. As I have written above, mismanaged plastic waste is making the situation much worse. In addition to that, as an economy develops, the consumption of plastics is often going up. Therefore, the situation will soon be disastrous. That is why we have to act now. Fortunately, I was given this opportunity to discuss this issue and to work as a chief of this table. From this experience, I have learned so many things. Of all of the things I have learned from this experience, one of the most important lessons is that it is important for us, as a young generation who is aware of this issue, to lead the society so that we do not destroy the planet.

This proposal is not perfect and adequate. However, I believe this step is the most important step for all of the participants in this table. Also, on behalf of table 6, I hope this proposal will be a crucial step for other people as well. It was my pleasure to be the chief of this table.

Participant's Essay

Ayu Puspita Ningrum

During my short amount of days in the 65th International Student Conference (ISC65), meeting diverse people from all across the world and exchanging different views on many issues are the most memorable experience for me. As a human being who cultivates through constant improvising, I am much honored that I was able to express my opinions and receive constructive feedback at the same time. ISC65 has awarded me the occasion in which I could broaden my horizon and work with people from different walks of life, and that was a very valuable experience that I believe will not be possible to be measured in any ways.

For me, the table proposal that I and my other tablemates constructed together was not exactly satisfying as I believe that we were not able to deliver the main idea that we desired to. As we tried to accommodate every opinion that was spoken and many of us had a very strong approach in suggesting ideas, I sensed that the goal was not reached at the scheduled time for we had troubles in assembling everyone's recommendation. I also think that when we initially worked on the proposal, we did not try to identify the core problem and instead chose our subject first. Such decision resulted in taking a longer time to identify what sort of problems that we could serve our policies to. In my opinion, I do believe that each of us had presented our best version of hard work, but speaking from the perspective of work ethic, I have to be completely honest that we could do much better in delivering our ideas through the proposal. Hard work does not justify quality, and it is important for me to remind myself that I am in the requirement to always improve for the better.

In terms of changes in the proposal, I would like to change the research problem and thus, the policies that we could come up with to solve the regarded. I wish I could have talked and listened more about my table chief's opinions – which in this case I truly respect – as I believe that he had more knowledge and well-informed research methodology in comparison to me. If it had happened, I believe that our proposal could deliver a much better result in not only the policies but also our teamwork management.

However, I still hope that the proposal which my tablemates have achieved together could change the way our current society views plastic usage and its consequences. It is very imperative for societies at all levels to employ the 5R that has its first step on refusing the usage of plastics. In my perspective, one of the best waste management is through a bottom-up approach that emphasizes the action of unwillingness to litter the environment from the very beginning. The government's roles are also mandatory to be included, in particular concerning how they exert the waste management policies in each region of a country. As they have a very large portion in terms of budget allocation and other factors that are influenced by it – the amount of facilities, the sort of technologies needed to

accommodate the necessities – I hope that the Government of Japan could see our proposal as an enlightening design to assist our target country in achieving the corresponding global goal.

Frankly speaking, ISC has not only affected my future goals but also my whole perspective towards the prevailing issues in the world. Before joining ISC65, my future goal was only to continue my studies and obtain a decent job to support my necessities. I had never experienced other cultures outside my knowledge and it was never in my lists to do so. At certain moments, while it did cross my mind, it was never something that I perceived a must-do. However, after experiencing the Japanese cultures and exchanged information regarding other cultures, I become motivated to expand my experience in cross-cultural exchanges and strengthen more of my cultural capital. Once more, I become interested again to study the logographic language and even in the present, I would like to study the Japanese language to attain the proficiency certificate. Without attending the ISC, I will never have the courage to study a new language and it truly meant a huge step for me to have my mind opened in such a way. I also have become more apprehensive concerning the refugee issues that exist in Japan, as to me, it is a sensitive topic that is impossible for me to comprehend. I am immersed that many foreign participants were brave in speaking their minds on this matter, with the incorporation of Japanese participants who welcomed so well in receiving the recommendation. Their presentation and table proposal made me conscious that even though I am not a Japanese citizen, I still have a word to say and an action to take for the refugee matter is a problem at the global level.

In regard to the changes in my life, instead of focusing on increasing the number of published papers that I could obtain, I would like to have more cross-cultural experiences before I graduate from my university. I have determined to apply for more programs that I consider could give me a huge value as ISC, and I hope I may attain the honor to participate. I truly hope that my next step will assist me in encountering more people who grant me the honor of enriching my knowledge and inclusively, my cultural capital.

Table 1



Table 2



Table 3

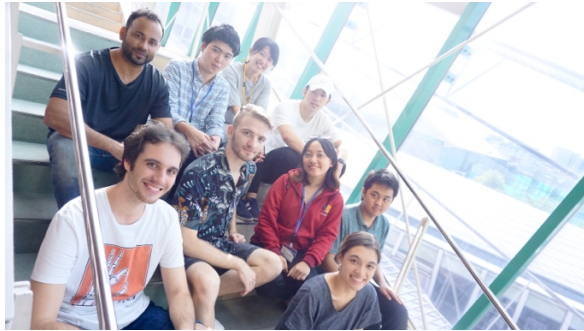


Table 4



Table 5



Table 6



成果発表会 開催報告

文責 角尾十和

会議 8 日目にあたる 2019 年 9 月 1 日、国立オリンピック記念青少年総合センター、センター棟セミナーホールにて、成果発表会を開催した。成果発表会は、各分科会のディスカッションの詳細や提言の内容を一般向けに公開し、発信することを主目的に開催した。Facebook での同時中継、配信も行い、広く社会に発信することに取り組んだ。また、国際協力、国際平和構築の第一線でご活躍なさる方々をお招きした講演や観覧客と各分科会の学生が交流できるセッションも行い、未来の国際平和に向けて若者が取り組めることを一般の方々と共に考える場とすることを目指した。

当日は来賓客を除き、53 名の一般観覧客(大学・大学院生 27 名、社会人 26 名)にご来場いただいた。以下、詳細を報告する。

基調講演

今年度は、昨年度のファイナルフォーラムに引き続き、ご後援をいただいている国連開発計画駐日代表事務所 駐日代表の近藤哲生様に基調講演をお願いした。2015 年に国際連合で採択された世界的目標である持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs) について、その意義や現状についてご講演をいただいた。

各分科会提言発表

各分科会が設定した問題、そして会議中に作成した政策提言の内容を 15 分間のプレゼンテーションにまとめ、来賓客、観覧客向けに発表した。クロージングスピーチの中で、UNESCO アジア太平洋地域事務所長の青柳様より、「高いレベルのディスカッションができていたことが伺える大変良い発表だった。」と高評価をいただいた。

クロージングスピーチ

本年は、UNESCO アジア太平洋地域事務所長の青柳茂様にクロージングスピーチをいただいた。はじめに、各分科会の発表にコメントをいただき、「平和と教育」についてご自身の UNESCO での経験を元にお話いただいた。

観覧客向け交流会

当会議参加者と観覧客が交流し、意見交換できる時間を設けた。来賓としてお越しいただいた方々にも、各分科会と交流いただき、コメント、フィードバックをいただくことができた。また、来場者の学生が参加学生と交流する場面も見られ、有意義な交流を持つことができた。



日本文化体験

文責 山本千尋

8月30日(金)13:30~16:30で日本文化体験を行った。この体験の目的は、外国人参加者に日本の文化を体験して学んでもらうほか、日本人参加者に新鮮な気持ちで日本文化を学べる体験を提供することであった。また、会議の時間の多くは議論に当てられるため、参加者同士が交流し楽しめる機会を設けるという意図もあった。このような目的のもと、外部講師を招いてソーラン節体験と書道パフォーマンスの鑑賞・体験を行った。

ソーラン節

昨年に引き続き、講師に極め組の丸山様を迎えてソーラン節体験を行った。最初の丸山様の力強く、本格的なソーラン節のデモンストレーションに参加者は圧倒された様子で、大変に盛り上がっていた。その後の体験では、議論で座っている状態が続いていた分、思いきり体を動かしたことでリフレッシュできた様子が見受けられた。最後には全員で一曲を通して踊り、ソーラン節の荘厳な雰囲気を楽しみつつも、笑顔あふれる体験となったようだ。

書道パフォーマンス

今回、新たな試みとして、書道パフォーマンスの鑑賞と、その後に書道パフォーマンスの体験を取り入れた。これは、昨年の希望調査で書道が挙がっていたことから案を得て、日本人にも新鮮で楽しめるようなものとして書道パフォーマンスという形で新たに導入したものである。

書道パフォーマンスは中央大学書道會様をお願いして、「龍翔鳳舞」の文字と今年度の総合テーマ”Embrace Diversity as Youths of Today and Driving Forces of Tomorrow”のそれぞれをモチーフにした2作品を演じていただいた。外国人参加者はパフォーマンスに見入り、スマートフォンで撮影する姿が見受けられた。日本人参加者にとっても珍しい演出であったため、感嘆の声が上がっていた。

その後、書道パフォーマンスの体験として、SMAPの「世界に一つだけの花」の1フレーズを一人一文字ずつ書いていき、参加者全員で一つの作品を完成させた。このフレーズは、今年度の総合テーマに関連付けて、参加者の多様性が表現できるだろうとの考えから用いた。初めて書く漢字に緊張した面持ちの参加者もいれば、自分はこの文字を書きたい！と張り切る参加者も見られた。

総括

会議は分科会ごとに過ごすことが多いが、日本文化体験では全員でソーラン節を踊り、全員で書道パフォーマンスを作り上げ、ISC65全体としての一体感が出たように思える。ソーラン節は体を動かすのに対し、書道パフォーマンスは見る・書く、という落ち着いた種目であったことが良かったと考えている。終了後のアンケートではどちらも同程度の人気があり、ソーラン節の運動がリフレッシュになったという意見と、運動量がきつすぎたという意見が得られた。したがって、今後も静と動を感じられる2種目を提供することで参加者の満足度の向上が考えられる。また、他の参加者と一緒に体験をできたこと自体が楽しかった、体験前に歴史的背景や作品の説明があったことでより日本文化に浸ることができた、という意見も寄せられた。国際

学生会議としてこの文化体験をする意味は、参加者同士の交流を促進する以外にも、参加者同士が楽しんで一体感を得ることで日本文化の伝播に寄与できることにあるのではないかと。

体験後、参加者に体験したい日本文化についてアンケートを取ったところ、日本料理体験(餅づくり、寿司作り含む)、浴衣・着物着付け体験、茶道・華道、日本の楽器体験などが多く挙げられた。これらの参加者の意見を参考に、今後の国際学生会議でも様々な取り組みが実施されることを期待している。



東京近郊スタディツアー

文責 友成咲良

概要

本ツアーは会議期間の中日に行われ、基本的にオリンピックセンターにて議論に集中する日々を送る参加者がリフレッシュできるように、また、日本の首都である東京とその近郊の雰囲気味わってもらえるように組まれたプログラムである。昨年はエリアごとにツアーの行き先を決めていたが、今年は7つのテーマに基づいて東京近郊でのプランを考案することで、参加者それぞれの嗜好に合った体験や思い出づくりの機会を提供できるであろうと考えた。実行委員による事前の下見も含めたプラン作成の完了後に、参加者に行き先の希望調査をしたうえでグループに分かれてツアーを実施した。

総括

7つのテーマに基づいたツアー内容は以下の通りである。

1. Nature (高尾山登山、温泉で入浴)
2. Shopping (新宿周辺で買い物、染物や和太鼓体験)
3. History (鎌倉や江ノ島の寺院を中心に散策)
4. Food (浅草にて食品サンプル作り、流しそうめんやお好み焼き作り)
5. Subculture (三鷹の森ジブリ美術館、渋谷散策とスカイバス乗車)
6. Art (侍ミュージアム、江戸東京博物館、サンシャイン 60 展望台にて VR 体験)
7. Athletics (SPACE ATHLETIC トンデミ、お台場散策)

各ツアーへの予算の制約があるため、徒歩による移動距離が長くなってしまう場面も多々あった。しかしそれにもかかわらず、ツアーに関する事後アンケートを実施した結果、大多数の参加者のツアーに対する満足度が高いことが明らかとなった。好評な理由として、「議論からはなれて気分転換ができた」、「分科会以外のメンバーと話すことができた」といった感想が多く見られた他、個人の好みや期待に沿ったプランを通じて日本文化を享受できたことも良かった点として挙げられている。また、上記のテーマに加えて、国会議事堂等の政府関係施設や日系企業への訪問を希望する声もあったため、来年度の訪問地の候補として参考にするのではないかと思う。



各種交流総括

文責 山本千尋

会議中の全員参加のレクリエーション(以下レク)として以下4種のプログラム、任意参加でモーニングアクティビティを行った。レクを通して、参加者同士が分科会を越えて交流できる場になるようなプログラムを企画した。

国/文化の紹介

発表希望者を募集し、自分の国について発表する時間を設けた。時間の都合上、発表者は4人に限られたが、希望者が殺到した。歌を歌ったり、みんなでできるゲームをしたり、と様々な発表があり、見ている参加者も楽しんでいた。

プレゼント交換

参加者に予めお土産を用意してもらい、当日にくじ引きで決められた人とお土産の交換を行った。くじ引きは3ラウンド行い、参加者はランダムで3人とプレゼント交換ができるシステムを用いた。初めて知る参加者を呼ぶ声や、写真でしか見たことのない参加者との交換を喜ぶ声などがあちこちから聞こえた。知らない人同士が話すきっかけになった上、持参したお土産が話題になり話も弾みやすかったようだ。国/文化の紹介と同様に、「国際」学生会議として参加者の国・地域やその背景にある文化を越えて、交流の良い機会になったと考えている。

回転寿司トーク

参加者に二重の円を作ってもらい、内側にいる人は外側、外側にいる人は内側を向いて二つの円で参加者がペアを作れるようにした。そのペアで、1分間こちらが用意したトピックについてトークをし、時間が来たら外側の円の人は隣の席に移動して、また新たなペアと1分間トークをすることを30回繰り返した。1分間という限られた時間ではあったが、多くの参加者が知らない参加者と話すきっかけになったと考えている。

箸渡しレース

グミ、ペン、小豆を箸で持ち、グループ内で次の人に渡していくレースを行った。1グループは7~8人で、箸で渡せた回数が最も多いグループを競うレースである。外国人でも箸を上手く使っている参加者が多く、応援する声、急かす声などが飛び交い、白熱したレースになった。

モーニングアクティビティ

日本の遊び体験と議論前に体を動かすことを目的とし、だるまさんが転んだ、ラジオ体操、けん玉を3日間任意参加で行った。朝7:30~と時間が早かったため、参加人数は毎朝10人弱にとどまった。

総括

会議後、参加者にアンケートを行った結果、参加者はどのプログラムも楽しんでいただけたようだ。とりわけ、プレゼント交換はとても人気があった。緊張状態にあった初日に、各自持参したお土産を媒介として他の参加者と話す機会ができたのが効果的だったと考えられる。今後改善すれば目玉イベントにできるだろう。また、モーニングアクティビティに、参加意欲はあっても起きられなくて参加できなかった人が多かったことがわかった。そこで、日本人にとって身近な遊びを、午前の議論セッションの時間でレクとして来年以降取り入れることを提案する。今年のレクは全て夜に行ったが、朝は議論に当てるよりもレクで体を動かした方が、効率の良い議論、会議になると考える。

国/文化の紹介



回転寿司トーク



モーニングアクティビティ



第 4 章 終章

謝辞

謝辞

助成

一般社団法人 MRA ハウス
国際教育振興会賛助会
双日国際交流財団
三菱 UFJ 国際財団

協賛

株式会社ジャイロス
帝人株式会社
株式会社ビジョン
株式会社 TBI JAPAN

後援

外務省
文部科学省
経済人コー円卓会議日本委員会
日本国際連合協会東京本部
国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所
UNICEF 東京事務所
国際教育振興会

寄付金支援者の皆様

石塚啓太様

内海貴啓様

岡山夏生様

加茂悠希様

堺井京平様

砂原佑香様

Joyce Gao Wenjing 様

土橋美燈里様

馬淵将明様

山本昂亮様

山田智希様

を始め 19 名の皆様にご支援頂きました。

クラウドファンディング支援者の皆様

西田善太様

石田寛様

岩田和央様

中関淳様

岡本亜美様

駒谷剛志様

佐野憲様

野路武寛様

松本滉司様

南方翔守様

三好裕貴様

山本六三様

を始め 37 名の皆様にご支援頂きました。

学術協力を頂いた皆様

第 65 回国際学生会議ワークショップ

経済人コー円卓日本委員会 石田寛様

帝人株式会社 山名慶様

帝人株式会社 澤田隆幸様

帝人株式会社 岩永未央様

事前招集会

共同通信社 井田徹治様

玉川大学 小林亮教授

分科会活動

NPO 法人 ピースオブシリア 中野貴之様

国際基督教大学 高松香奈教授

国際基督教大学 Smith Nicholas 教授

静岡大学 Mordecai G. Sheftall 教授

認定 NPO 法人 FoEJAPAN 深草あゆみ様

東京メンタルヘルス・スクエア 武藤収様

国際 NGO Greenpeace Japan 大館弘昌様

成果発表会

国連開発計画駐日代表 近藤哲生様

UNESCO アジア太平洋地域事務所長 青柳茂様

以上の方々を始め多くの方にご協力頂きました。

この場をお借りして御礼申し上げます。

皆様、誠にありがとうございました。

第 65 回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：中関令美

編集責任者：Do Hoang Hiep

発行：日本国際学生協会 第 65 回国際学生会議実行委員会

〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学文化総部 I.S.A.



International Student Conference